
星騎士

ぱんだまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星騎士

【Nコード】

N3524BA

【作者名】

ばんだまる

【あらすじ】

魔と戦うための騎士位と呼ばれる、神から叙任される力によって世界が支えられた世界。その最高位である星騎の位を目指し若者が集う星士官学校から物語は始まる。戦乱の足音は刻々と近づいていた……。

序章：騎士位

太古の昔、この世は魔と呼ばれるものであふれかえっていたという。か弱き人は魔に奪われ、奪われ、ただ奪われ続けた。

そんなか弱き人を哀れみ、神が人に与えた、絶望と戦う力、騎士位。資格を得たものは、時空の果てにあるハルセウス宮殿にて叙任されるという。

「小騎士」

見果てぬ可能性を秘めた者に送られる称号。

世界の秩序を守護する役割を担い、生命の持つ数多の能力の1つを授かる。

叙任には優れた才能と強い勇気が必要とされる。

「英騎士」

あふれる素質を開花させた者に送られる称号。

この世の命ある者全てを守護する役割を担い、四大元素の1つを操る力を授かる。

叙任には優れた技能と澄んだ心が必要とされる。

「公騎士」

世界を護る使命を果たせる者にのみ送られる称号。

この世の物質全てを守護する役割を担い、重力を操る力を授かる。叙任には優れた技能と弛まぬ努力、そして正義感溢れる熱い魂が必要とされている。

「星騎士」

世界を救い、救世主と謳われた人々に授けられたきた称号。

時を守護する者とも言われ、時空を操る力によって千年の時を生きる。

叙任には優れた技能と強い精神、そして揺るぎない覚悟が必要とされている。

騎士位の力は魔を廃し、この大陸に人の世を生み出した。

最高位である星騎の力を4人も携える大陸最大の国家、ディ・ラオール神国。

国家を率いるのは星騎の位をもつレルアレーゼ・ラオール。

彼は1000年続いた星魔戦争を終結させ、王として、人神として、戦後の1000年間、大陸の秩序と平和を維持し続けた。

街は栄え、民は富み、世界はラオール神国の元、平和を享受し続けた。

そんな平和な時代の終焉となる星歴2212年。

国立星士官学校より物語は始まる・・・。

第一章：国立星士官学校

大陸中の英才、鬼才が至高の存在である星騎の位を目指し日々、修練に励む場所が、デイ・ラオール神国にある国立星士官学校である。

創立者は、最強の星騎士と謳われる、神王レルアレーゼ・ラオール。設立から800年。星騎士の誕生こそないものの、次位となる公騎士を数多に排出し、星騎士に最も近き門と言われる。

神都ラオールのやや郊外に位置する広大な敷地は普段は向学心に富んだ厳粛な制服に身を包んだ生徒であふれかえり活気と情熱に溢れた風景が伺える。

だが、今はこの眼に移る校舎の姿は別の情熱に満ちあふれていた。そう、明日は神国の建国1000年を祝う、国を挙げての祭りが始まる。

千年祭の前日なのだ。

「明日は千年祭か……。」

学校の窓からは眺めると、敷地にも様々な出店やステージがつくられており、明日はこの校舎すらもイベントの会場となることが伺える。

「カナート、何見てるの？」

窓の外を眺める俺が珍しかったのかそれ違ったセルフィアが俺に声をかけてくる。

「あれだよ。」

窓の外を指さして俺はそういった。

「ああ、千年祭ね。」

明日は講義もお休みだし、今から楽しみだよな。」

普段はお堅いセルフィアも、今からワクワクしているようだ。

「おっ、祭りの話かね、お二人さん。」

祭りときいて、にぎやか大好きのマルミが俺とセルフィアの間割り込んできた。

「よう、マルミ。」

「おっす、カナート！」

「おまえは千年祭、どうすんだよ？」

千年祭は大陸中の芸術、文学が集う文芸展が開かれ数多の音楽家が歌や音を数多の会場で奏でる。

往来には万国の食を網羅した出店が立ち並び

煌びやかな衣装を身につけた建国史を語るパレードが催される。

そんな中でにぎやか代表のマルミが何に興味をもつかと思ったんだが……。

「あたし？あたしは会場中の食べ処を食べ回るんだ。」

千年祭は国中の珍味が集う、一大イベントだからね！

私たちグルメにはたまらないわけ、わかる？」

訪ねられたマルミはさも当然のように答える。

だが、マルミは、グルメっていうか、まあただの食いしん坊だ。

「マルミ、ヨダレでてるよ……。」

セルフィアが慌ててこぼれそうになったよだれをハンカチで拭いてあげていた。

「ジュルつと、いかんいかん。

へへっ、それより、あなた達はどうするの？

私と一緒に屋台を回ってみる？」

「ごめん、私はミリファリア様の音楽会を観たいから……。」

ミリファリア・エスシオール様は星騎士の一人だが

芸才に優れ1000年にわたって数多の傑作を世に送り続けている。

音楽、絵画、彫刻、文学……彼女の才は止まることを知らず、星騎士であるが故に長きに渡って生み出される作品の数々。

神国が芸術において他国を圧倒している唯一にして絶対の理由がミリファリア様にある。

「音楽会なら、会場の近くにも食べ処がでるはずだよ。

あの辺りはミリファリア様の住むマルネイアから多くの店がでてくるからね。

マルネイアと言えば、最大の貿易拠点！国中どころが、世界中の珍味が……じゅるう。」

「マルミ、よだれ、よだれ……。」

「またもや、セルフィアがよだれを拭いてあげる。マルミ。よだれは自分でふけよ……。」

「じゅるじゅるっ、へへ……。」
「で、どうする？ 食べ処にいながらでも聴けないことはないけど……。」

「うん……ごめん、やっぱり、近くで観たいから。ミリアリア様に会える、数少ない機会だし。」

「セルフィアはミリアリア騎士団長に憧れてるからなあ……。やっぱり聖騎士団へ配属希望なわけ？」

「うん、入団できる見込み、少ないけどね。」

星騎士はそれぞれ、専属の騎士団を有しており
聖騎士団はミリアリア様が騎士団長を務める直属の団となる。
芸才があるとはいえ、星騎士が率いる以上、音楽隊ではなく
れっきとした戦闘部隊、エリート騎士団という奴だ。
ミリアリア様に憧れ入団希望者も後を絶たず、
神国随一の狭き門と言われる騎士団となっている。

「そんなことない！ そんなことないよ、セルフィア！
あなたはやればできるんだから！
ファルナ先輩の妹でしょ！ もっと自信を持ちなさい！」

「もう、姉様の話はやめてよ……。」

「またまた、うれしくせに〜！」

大陸中から集まった英才が通う、国立星士官学校において

その頂点を極める、至高の天才！

レーナレーナ様の末裔にして、その再来と言わしめる、ファルナ様！

うーん、その人の妹なんて、あなたはなんて幸せ者なのよお！

レーナレーナ様は星騎士の一人で、未だにご健在の方だ。

星騎士は歳をとらないため、その何十代目にもあたる子孫である
ファルナ先輩や目の前のセルフィアと同じ時を生きていることにな
る。

あの清廉な銀髪の神女といわれるレーナレーナ様の血を受け継いで
いることなど

マルミはまったく気にかけていないようだ。

「べ、別にそんなことないけど……。」

「馬鹿者！身内が褒められてうれしくない者がおるか！

ほれほれ、素直になってみなさい、ほれ、ほれ！」

マルミがセルフィアの顔を後ろからつかんで、

こめかみのあたりをぐりぐりしてる。

俺としては、マルミのよだれがセルフィアにつかないかと、ヒヤヒヤなわけだが。

「ふ、ふええ……。」

「おい、マルミ、あまりセルフィアをいじめるなよ……。」

俺がみかねて、止めに入る。もちろん、よだれの方が気になって、
な。

「はいはい、カナートはセルフィには優しいんだもんね。
で、あんたはどつするのよ?」

「はい?」

「千年祭、どつか行くあてがあるの?」

あて……か。

そついえば、あまり考えてなかったな。

「まあ、適当に飲んで騒いで、つて所か?」

「やる気ないなあ……カナートは……」

つていうか、仮にもエスシオールの家名を冠する者が
始祖であるミリファリア様の音楽会にでなくていいわけ?」

「うるさいなあ……俺は分家の方だからそんな義理はないんだよ。」

星騎士の子孫とすんなり言えるセルフィアと違って
俺のうちはいろいろと複雑だから、面倒なんだよな。

「つたく、せつかくの千年祭なのに、そんなんでいいわけ、カナ
ート?」

「俺はファルナ先輩とユウキ先輩の模擬戦にでるのが目的だからな。
後はあんまり興味ないんだよ。」

千年祭の催しの1つに、星士官学校の騎士候補生の中でも
成績優秀なものが集まって行う模擬戦がある。

騎士候補生、とはいっても星騎を目指している公騎士もいるからかなり、レベルの高い模擬戦になっている。

「はぁ・・・男って血の気が多いわよねえ・・・もっと祭りを楽しむ心を・・・。」

「食い気の多いマルミに言われたくないぞ・・・。」

「う、うるさいわね・・・それで、あなたはどっち派なの？」

「はい？」

「ファルナ先輩の紅騎士団か、ユウキ先輩の白騎士団か、どっちに付いて戦うのよ？」

模擬戦のメンバーは、戦力が均等になるよう

成績上位者10名があらかじめ、別々のチームに別れるようになっている。

後の者はなるべく希望する方に配属されるが、人数の兼ね合いもあり絶対ではない。

「えっと、確か希望通りいけば白騎士団だったかな。」

「あれ？ファルナ先輩の敵にまわるつもり？」

「知らないわよぉ～命落とすわよぉ～？」

「模擬戦で命落とすわけないだろ・・・。」

「ファルナ先輩とは一度剣を交えてみたいしな。」

それに、剣聖と謳われるユウキ先輩と共に戦ってみたいって思っ
てな。」

「ふうん、ユウキ先輩に変なことしたら、

白騎士新鋭隊がだまっちゃいないから、気を付けた方がいいよ？」

「んなことしないって……。」

マルミは変なところでミーハーだが情報は確かだ。

白銀の剣聖と謳われるユウキ先輩には、彼女の鎧装束を真似た

白い鎧を身にまとう、白騎士親衛隊ってのがいるのは確からしい。

なんだか、本当に命が心配になってきたな……。

第二章：千年祭

とうとう、始まった千年祭当日。

元々、大陸でも最大の国家であるディ・ラオール神国の建国祭は大陸中から人が集まり大陸最大の祭りになる。

今回は特に千年目ということもあり、歴史上最大といっても良い規模になっていた。

世界中から人が集まり、神都ラオール全体が人であふれかえっていた。

「ふああゝあ・・・適当にぶらつくか・・・。」

俺が祭りで参加する模擬戦は今日の午後から始まる。

模擬戦が始まるまで寝ていようかと思ったが

祭りの活気がすさまじく、神都のかなり郊外にある学生寮にまで

歓声が地鳴りのように響いてくる。

とても眠り続けられるような状態ではない。

そんなこんなでたたき起こされた俺は

まだ模擬戦が始まるまでに時間もあるので祭りを見て回ることにした。

「さすがに人が多いな・・・。」

大通りにでると、人だらけで、一步も動けなくなる。

そんな状態でも、空中劇場で入れ替わり数多の名劇が催され食べ物も頼めば空からロープを伝って何でも手に入った。

そのため、騒ぐ分にはみんな困っていないようだ。

「ははっ、ファルナ、君には負けるよ」

そんな時、聞いたことのある名前が人混みから聞こえてきた。

「ふふっ、ユウキもやってみなよ、あなたなら大丈夫でしょ？」

この声、聞いたことあるな……。

俺は人混みの中をキョロキョロと見渡し、声の主を捜す。

「ん……あれは……。」

声の主と、もう一人、初めて見る凛とした女性が二人で何かを話していた。

「私がかい？ははっ、ダメダメ、こういうのは苦手なんだよ。」

「紅白戦の前哨戦よ、ユウキ。」

敵前逃亡は騎士の名折れ、さ、選えびなさい。」

「ふふっ、まいったな、ファルナには。」

見知った顔をようやく人の中からみつけだし、俺は声をかけた。

「ファルナ先輩！」

「あら、カナート君、ちょうどいい所に、

こっちへいらっしやい。」

ファルナ先輩が手を振ってこっちへこいと行っているようだ。

俺が近くまでいくと、もう一人の女性がファルナ先輩に話しかける。

「知り合いかい？」

「ええ、妹のお友達よ。」

どうしたの、今日はセルフイアと一緒にじゃないの？

あの子、急いで家をでたみたいだから、てっきり君といるのかと思ってたわよ？」

ファルナ先輩が、いじわるそうに、俺にそう問い掛けた。

この人は俺とセルフイアの仲をからかって、楽しんでいるんだ。

「あ、えっと、セルフイアは今日は

ミリファリア様の音楽会にでるって言って……。」

おれは少したじろぎながらも、説明する。

やっぱ、ファルナ先輩はなんて言うのかな、身にまわっているオーラが俺達とは違う気がするんだよね。

「ああ、それで、ね……。」

そっかそっか、君を一人にして、あの子も罪な子ね。」

いしししっという感じでファルナ先輩がこちらをみてわらう。

普段はりりしい人がそういうことすると、ギャップがすごいな。

「え、えっと、ファルナ先輩は行かなくていいんですか、音楽会？

エスシオール家もファルシオン家も、本家は全員参加するって聞いてますけど……。」

ミリファリア様の音楽会は会場内は全席指定席で席は上流階級のみなさまが独占される。

一般客は会場の外から音楽を聴くしかないのが現状である。
それでも催される度に、会場の周りには耳を傾ける一般客が絶えな
いと言うのだから
その人気の程もうかがい知れるというものだ。

「いいのよ、あんなの。」

そう冷たく言い放つファルナ先輩。
まあこういう興味もない人にとってはそんなものといえばそんなも
のだろう。

「ふふつ、ファルナはラスティア様のシンパだからね。
ミリファリア様の音楽会には興味ないのさ。」

先ほど、ファルナ先輩と話していた女性が、会話に入ってくる。
ファルナ先輩と親しそうだが、俺は会うのは初めてだ。

「あ、えつと・・・。」

「初めまして、かな。私はユウキ・ミツカセ。
ファルナとは士官学校での友人って所だ。」

そういつて、ファルナ先輩をみて軽く笑う。
ユウキ・ミツカセって言えば、ファルナ先輩と並び称される人物だ。
剣聖とさえ言われる剣術の腕は、ラスティア様に並ぶとさえ言われ
るぐらいだ。

騎士位は確か公騎を授かっていたと思う。
学生で公騎なんて、超のつくエリートだぜ？

「あ、お、俺はカナート・エスシオールです。」

ユウキ先輩のご高名は聞いています。」

「ははっ、堅くなるなよ、カナート君、だったかな。」

女の人なんだけど、すらりと切れ長い眼に整った顔立ちから、美形の青年のようにも見える。同姓にもてそうなタイプだよな、この人。

「はっ、はい、その、す、すみませんっ！」

「ユウキ、カナート君をからかうとセルフィアが怖いわよ？」

また、ファルナ先輩はそうやって俺をからかう。

「ん、あのセルフィアがかい？」

これは驚いた・・・なかなかやるものだね、君も。」

「ちょ、ちよつと、ユウキ先輩、本気にしないでくださいよ！
ファルナ先輩も、俺をからかわないでください！」

俺の必死の抗議も二人に笑い飛ばされてしまう。

「ふふっ、そうだ、カナート君もやってみなよ。」

ファルナ先輩が手を引いて、ちよつとした広場に置かれたテーブルを指して言う。

「えっ？」

そういつて、テーブルを指さした。

4×3に並べられたカードは、いま神都ではやりの
エース&キングという簡単なカードゲームだ。

「おいおい、ファルナ……。」

「ユウキは黙ってなさい。」

ほら、このゲーム、やったことぐらいあるでしょ?」

「え、ええ……何度かは……。」

「今、ユウキと紅白の前哨戦をやるう、って話してた所なの。」

ファルナ先輩は乗り気のようにだが、ユウキ先輩はいまいち気乗りし
ないようだ。

「私はちょっと、こういうゲームは苦手だね……。」

それを知ってて、ファルナはやるうやるうってうるさいんだ。」

「ほら、ユウキ。文句言わないの。」

カナート君とペアを組んで良いから。

さあ、さあ、勝負!」

ファルナ先輩はすっかりやる気のようだ。

「まいったな、ファルナにも。」

そういうわけなんだが、カナート君、力を貸してくれるかい?」

「俺でよければ、一緒にやりましょうか。」

まあこのゲームも嫌いじゃないし、やってみるか。

第三章：“エース&キング”

俺はテーブルにユウキ先輩と共についた。

ゲームとはいえ、あのユウキ先輩やファルナ先輩と直接戦うことがあるとは思っても見なかった。

”エース&キング”はエースをうまく使い、相手のキングを探り引き当てるゲームだ。

手元にある情報から相手の思考をさぐり、カードをめくる度に相手の表情を伺い、心理を読んでキングの場所を探し当てる。ちよつとした心理戦のようなものだ。

エースは最初から裏返さずに場に配置しなければならずしかも相手に引かれると自分が不利になるという、一見するとお荷物のようなカードになる。

しかし、このカードを相手に引かれないように、エースを護る配置にすると

本来護るべきキングの位置が、自然と浮き彫りになってしまう。

エースを護ろうとすると、キングの場所がばれてしまう。

エースを護らないと、引かれた場合に不利になる。

だが、相手に気づかれなければそれを逆手にとって有利にも進める。

エースをどこまでフェイクにしてキングの位置を隠せるか。

そついった心理戦がこのゲームの特徴だ。

ユウキ先輩はこういう心理戦は不得意らしく、俺がカードの配置は決めた。

カードの配置は一見、エースを護ろうとしているフリをしている、とみせかけて、本当にエースと護ろうとしているというダブルフェ

イクをつかった。

ファルナ先輩の読みを逆手にとろうという作戦だ。

「じゃあ準備はいいわね。

私からひくわよ。」

ファルナ先輩予想通り、カードの配置から

俺がエースを護ろうとしているフリをしている、と読んで攻めてきた。

「あら、私がエースを護っているのはフェイクじゃないか、と読んでいるのに驚きもしないのね。

予想通りって感じなのかしら？」

っ！あぶないあぶない、思わず顔にでる所だった。

ファルナ先輩は相手の心理を読みながら、次の一手を決めようとしている。

運に頼らない、徹底的な情報戦。

「どうですかね。案外その次がキングで、

内心ビクビクしてるかもしれませんよ。」

俺は何とかポーカーフェイスで答える。

「そ、そうなのか、カナート君！

ファルナにうっかりキングをひかれてしまわないか!？」

ユウキ先輩はクールな外見とは裏腹に、感情的な所があるようだ。

先輩にはカードを見せなかったのは正解だったかな。

こんなに感情だしちゃ、あっという間にファルナ先輩に読まれてし

まう。

「あら、ユウキにはカードを見せてないのね。

ふふっ・・・思ったより、手強そうね、カナート君。」

ファルナ先輩の氷の微笑を前に、少したじろぎつつ、俺は先輩のカードを引く。

ファルナ先輩のカード配置はエースを捨ててキングの位置を読みにくくする作戦だ。

エースがすぐ引かれてしまう反面、キングの位置が読みにくい。目の前のエースはただのエサなんじゃないか、とさえ思えてしまう。

そんな不安を押し切って、俺はエースを狙っていた。

「あら、そんな普通の戦い方で大丈夫かしら？」

「むしろ、俺はここがキングかなって思ったぐらいですよ。はずれたのは残念ですけどね。」

お互い腹のさぐり合いが続く。ユウキ先輩は

ハラハラしながら、俺とファルナ先輩の手札を見比べている。

クールな人のこういうあたふたした所、ちよっとかわいいかも。

そんなふしだらな考えを見抜かれたように、ピシヤリ！と

ファルナ先輩が、やや強くカードをめくりあげる。

「あら、あなたもここにキングはおいてないのね。

てっきり、自分のことを知っているのかと思ったんだけど。」

俺が引いた場所と同じ場所を、ファルナ先輩は引いてきた。

この一枚は、最初は俺のダブルフェイクで外した相手の読み筋を見事に修正してきた一手だ。

もう俺がダブルフェイクを使っていたのを見破っているかもしれない。

ちよつと負けそうな気がしてきた。

「むしろキングから離れた所ばかり引いてくれて、

俺としては好都合ですけどね。

本音を押し殺したはったりをファルナ先輩が見極めようとしている中、

俺はファルナ先輩のエサのようにぶら下げられたエースに食らいついた。

相手にエースを引かれた時点で、先頭から順番に、というルールを無視できる。

通常なら3手は大丈夫、という安心感もなくなり

いつキングが引き当てられてもおかしくない状態になる。

その状態でもポーカーフェイスを……ファルナ先輩ならできそうだけだな。

ちらりとファルナ先輩の顔を見たが、まったく変わらない表情。

ほんと、読めないわ、この人……。

「そう、じゃあ私もエースを狙ってみようかしら。

だんだん、カナート君の作戦っていうのが読めてきたかな、って感じね。

私の性格を読んでいるのはいいけど、相手の作戦も状況次第で変わるものよ?」

ファルナ先輩が引いたカードはまっすぐに俺のキングへと向かう一手だった。

ファルナ先輩は、やはり俺のキングの場所を読み切っているようだ。

そうになると、ファルナ先輩は次でキングを引き当ててくれるだろう。

だが、俺に勝ち目がないわけではない。

俺はすでに相手のエースを引いており、キングがどこにいても一回で引き当てることができる。

後はキングの場所がどこかを読みとるだけだ。

普通はエースカードを引くと、ついエースカードの機能を使いたくなってしまう。

だが、きっとファルナ先輩なら……。

俺は選んだ次の一手は、エースカードを引いてなくても選べる、ごくごく普通の一手だった。

「キング……ですよね。」

俺が引いた場所は見事に、ファルナ先輩のキングカードだった。

「はぁ……負けたわ。」

まさか、ノーミスでキングまでたどり着くなんて……。

私も次には君のキングを引き当てて自身あったのに。」

ファルナ先輩はそう言って、笑う。

「ははっ、偶然ですよ。」

「君、なかなか強いのね。」

「将来が楽しみだわ。」

カードゲームとはいえ、ファルナ先輩に勝てた、というのは俺にとってはかなり、うれしいことだ。

「いや、カナート君だったか。」

このゲームでファルナに勝てた人は初めて見たよ。

「いやいや、さすがファルナ姉妹が見込んだ人物、ということか。」

ユウキ先輩はしきりに感心している。

「あ、もうこんな時間。」

私たちは模擬戦の団長だから早めに準備をしないといけないの。

「ユウキ、行きましょう。」

ファルナ先輩は時間をみて、そう告げる。

「ん、そうだったな。」

カナート君だったか、そういえば君の名前を模擬戦の参加者リストで見かけたような……。」

「はい、俺も白騎士団で参加させてもらうことになっています。」

「そうか、君がいてくれれば、模擬戦でもファルナに勝てそうだな。うんうん、頼りにしているよ。」

ユウキ先輩はすこぶるご機嫌のようだ。

「カナート君、模擬戦ではこの借りは返すから、ね？」

ファルナ先輩の顔は冗談なのか、本気なのか、相変わらず読めなかった。

ちよっと、怖い。

「それじゃ、行こうかファルナ。」

「そうね、またね？カナート君。」

そういつて、二人は足早に去っていった。
模擬戦か・・・どうなるんだろうな。

第四章：はらぺこ亭と音楽会

ファルナ先輩達と別れて、俺は模擬戦前に腹ごしらえをすることにした。

とりあえず、目に付いた「はらぺこ亭」なる食堂に入ってみる。

「いらっしやいませ〜。」

店員がくるので、俺は注文を頼む。

「マルアイア風ブタ猪の煮込み汁を1つ。」

「毎度、ありがとうございます。」

席におかけになってお待ちくださいーい！」

「さて、どこに座るか・・・ん？」

俺が座る場所を探して、辺りを見回すと、見知った顔がそこにあっ

「ガツガツ・・・ガツガツ・・・。」

あの食べっぷり。

「あれは・・・。」

間違いない。

「ガツガツ・・・おっ、ブリトニア産のかれい牛もあるの？」

じゅるじゅるっ、すいません、このかれい牛って頼めますっ?」

目の前に大量の皿が置かれているにもかかわらずさらに注文をしている。

「はっい、かしこまりましたっ少々お待ちください!」

「じゅるじゅるっつと、ガツガツ・・・ガツガツ・・・」

食べるのに夢中なのか、こちらに気が付かない。

「はぁ・・・おい、マルミ。」

声をかけても気が付かないとか・・・どんだけ夢中なの。

「ガツガツ・・・ガツガツ・・・」

「おいっ!」

ようやく、マルミがこちらを振り返るが・・・。

「おっ、もう、カレイ牛きたの?」

「誰がカレイ牛だ・・・。」

俺を店員と間違えたらしい。

「なんだ、カナートか・・・。」

どうしたの、こんな所で?」

「腹が減ったんで何か食べるものないか、って思ってたな。」

俺はそういつてマルミの隣に座る。

「カナートもなかなかやるねえ……。」

もう、20件ぐらい食べ歩いたけど、この店が一番のお薦め！

種類は豊富だし、味はうまいし、もう、生まれてきてよかったあ
くって感じ?」

いま、マルミのテーブルに並んでいるものだけでも2人前はあるし
さらにカレイ牛とやらも頼んでいるのに、これで20件目なのだと
いう。

「20件もまわっておいて、まだそんなに食べるのか、おまえ……」

「今日は千年祭だよ、堅いこといわないの。」

「……千年祭でなくても食べるだろ、おまえは。」

そうこうしているうちに、店員が料理をもってやってくる。

「おまたせしました〜ブタ猪の煮込み汁とカレイ牛の塩焼き、お持ち
致しました〜。」

俺が頼んだ料理だな。

「おっ、きたきた〜。」

あれ、ブタ猪って私頼んでないけど……おいしそうだし、まっ
いつか……じゅるじゅる。」

「ばか、それは俺のだ！」

「え、あ、そうなの・・・ちえっ・・・」

すいませ〜ん、ブタ猪の煮込み汁、あと1つお願いしま〜す！」

「は〜い、かしこまりました〜少々お待ちください！」

「おまえ、まだ食うのか・・・」

「いいから、早く食べよ、さめちゃうよ？」

マルミにせかされ、俺は箸をとって食べ始める。

「そうだな・・・ガツガツ・・・お？」

「ガツガツ・・・ガツガツ・・・おいしいでしょ？」

「う、うむ・・・ガツガツ・・・ガツガツ・・・」

「ガツガツ・・・ガツガツ・・・」

「ガツガツ・・・ガツガツ・・・」

俺達は夢中で食べ続けあつという間に平らげた。

だが、俺が食べた後もマルミは食べ続けて、まだ注文していたので声をかけて先に店をでる。

マルミ、食べ過ぎだぞ・・・。

店をでて、模擬戦までどうしようかなあとぶらついていると、不意に声をかけられる。

「あら、君……カナート君……かな？」

「えっ？あ、み、ミリファリア様……!？」

目の前にいるのは、ミリファリア・エスシオール様。神国に4人しかいない星騎士のうちの一人。

1000年にも近い時を生き、この国を支えてくださっている神に等しい存在だ。

「ふふっ、久しぶりね、カナート君。

大きくなつたわね……。」

「えっ？ひ、久しぶり……？」

「い、以前にお会いしました？」

ミリファリア様は何故か俺のことを知っている様子だ。

遠目に俺がみかけられることはあっても、話するのはこれが初めてのはずだ。

「えっ？あ、うん……エスシオール家の人には一通り面識あるから、私。」

「ふふっ、君は特別だったけどね。」

「と、特別……？え、え？」

「音楽会、来てくれたの？」

気が付けば、セルフイアが見に行くといっていた音楽会の会場がそばにあった。

ああそれでミリファリア様がいるのか。

ここでミリファリア様に、たまたま通りがかりました、とも言えず……。

「え、えつと……一応……。」

「それじゃ、中入りなよ。」

前の席、空いてるからとつとおいてあげる。」

「えつ？あ、でも……。」

「いいの、いいの。」

こうして、君が元気で、生きて、今日と言う日を迎えてくれた。

ラナリアにも感謝しなくちゃ、ね？」

ラナリアとは、俺の母であるラナリア・エスシオールのことだと思う。

「えっ？母のこともご存じなんですか……？」

「あれ、ラナリアからは何も聞いてない？」

俺も、俺の母親も、エスシオール家では分家にあたり

本家であるミリファリア様と個人的に関わることはないと思う。

仕事上で何らかのつながりがあったのかもしれないが、少なくとも俺は母親からミリファリア様の話を聞いたことは一度もなかった。

「は、はい……。」

「そっか・・・ふふっ、ラナリアも変わらないなあ・・・。」

「え？」

「義理堅い所。まっ、そこに惹かれたんだけどね。」

「あ・・・。」

「ごめんごめん、物思いにふけちゃって。」

「やっぱり年をとるとダメね。」

実際にミリファリア様は1000歳ぐらいにはなれると思う。

だが、星騎の称号を授かったときより、肉体の老化は止まるため見た目には、俺と同じ年ぐらいにしか見えない。

「そんなことないですよ、ミリファリア様は若くて・・・。」

「見た目は、ね・・・でも、」

「やっぱり千年も生きると、ちょっと疲れちゃう、かな？」

「・・・ミリファリア様？」

「ふふっ、年寄りの愚痴でした。」

「さっ、入って、最初の演目はすぐに始まると思うから。」

「あっ、はい・・・。」

その後、俺は音楽会の会場で、ミリファリア様の奏でる演奏を聴いていた。

星士官学校に通う者において、いやこの神国に住まう者にとって、星騎という称号は、まさに神に等しい存在である。

世界を救い、世界を支える至高の存在。

そんな人が何故、俺のことを知っていたのか。

音楽の演奏はすばらしかったが、俺の頭は疑問でいっぱいだった。

第五章：模擬戦

日も高くなり、いよいよ模擬戦の時間が迫ってきた。会場には、見物客の他にも、各騎士団の団長クラスが観客席に集まっている。

国立星士官学校の卒業生は大抵は神国の軍事関連に従事する。各騎士団は、ここから有能な候補生を見つけたし、自分たちの騎士団に招き入れる。そのスカウトの場としての役割もこの模擬戦にはある。

俺は特に入りたい騎士団があるわけじゃないけど有名な騎士団員の面々が見ている中で戦うと言われれば少しは緊張もする。

早々に受付をすませ、俺は模擬戦で所属する騎士団の装備を受け取る。所属は希望通り白騎士団に決まっており、役割は遊撃部隊に決まっているようだ。

白騎士団の集合場所に行くと、配布された白の鎧に身をまとった多数の騎士と、その中央には先ほど出会ったユウキ先輩の姿もあった。

「やあ、カナート！」

白騎士団へようこそ。君には期待しているよ。」

ユウキ先輩と目が合うと、彼女の方から話しかけてきた。

まわりからの、なんだこいつ、ユウキ先輩に話しかけられて！とい

う目線が痛い。

「今日はよろしくお願いします。」

「うんうん。」

君は遊撃隊に配属しているが、君の部隊は自由に動いてくれてかまわない。

私はたぶん、ファルナの足止めだけで精一杯だと思うからな。スキについて、本陣を狙ってくれてもかまわないし、

私が優勢だったら、加勢してもらって、ファルナを一気に倒してしまってもいい。」

お互いの騎士団には、それなりに有望な騎士が多数いるし、英騎の位をもつ者もいる。だが、士官学校時代に公騎を叙任されるような

強者は、ファルナ先輩とユウキ先輩ぐらいなものだ。

俺か？俺は騎士位なんてものは、当然もってないさ。

盛大なファンファーレが模擬戦の開始をつける。

「お、そろそろ時間のようだ。

ではみんな、いざ出陣といこうか。」

ユウキ先輩の号令とともに、白騎士団は模擬戦の戦場となる
デイ・ラオール神国の演習場へと向かう。

模擬戦では、鎧にゴム風船のようなものをつけて、それを3つ割られると退場となる。

ゴム風船といっても、結構厚手のものなので、結構強くてたたかない

と割れない。
中には塗料がはいっているの、割ると鎧の色がそまって、すぐわかるようになってる。

勝利条件は2つで、相手の騎士団長を倒す、もしくは相手の本陣にある団旗を倒すこと。

ユウキ先輩は隊をいくつか率いて、紅騎士団の団長であるファルナ先輩を狙う。

残りの隊は本陣警備だが、俺は遊撃隊となって、戦況に合わせて動くことになる。

しばらくは本陣警護で状況を見て動くのがいいだろう。

ドーン！

両騎士団が配置についた所で、開始のドラがなる。

このドラが3回聞こえたら戦闘開始だ。

ドーン！

ファルナ先輩はどう攻めてくるだろう。何かひょっとすると意表をついたやり方をしてくるんじゃないだろうか。

ユウキ先輩はファルナ先輩と戦う気だったけど、そううまくいくだろうか？

ファルナ先輩もかなり強いけど、ユウキ先輩はさらにその上をいく。まともにぶつかってくるとは思えない。

そう考えた俺はユウキ先輩に耳打ちして、俺の考えを伝えた

ドーン！

戦闘開始のドラがなると共に両騎士団が動き出す。
本陣と本陣が、正面でぶつかり合う。

本来、この本陣には相手の騎士団長がいるはずだが……。

紅騎士団の本陣にはファルナ先輩はおらず、
守備力重視の重歩兵部隊で固められていた。

ユウキ先輩をここで釘付けにして、その間にファルナ先輩が
敵陣へと攻め込み、旗を倒す作戦のようだ。

だが、こちらにも本陣に騎士団長であるユウキ先輩はいなかった。
俺が直前にユウキ先輩の影武者になって、本陣を進めていたからだ。

ユウキ先輩は端から本陣めがけて攻め込んできたファルナ先輩と
激突していた。

「ユウキ、あなたが旗狙いの部隊を相手にしてくるなんて、
どういふ風の吹き回しかしら！」

ファルナ先輩の木刀とは思えない、強靱な一撃を難なく交わすユウ
キ先輩。

「カナートの助言だよ。ファルナと戦いたかったらこちらの方がい
いってさ。

なかなか、どうして、あの子はやるものさ。」

そういつてユウキ先輩の目にもとまらぬ剣裁きがファルナ先輩の1
つ目の風船を割る。

「くっ、この人数でユウキを相手にはできないわ。」

さがって、下がるのよ！」

ファルナ先輩の部隊が引き上げる所を、ユウキ先輩が追撃している。不利になったファルナ先輩を守ろうと、本陣の部隊もそちらにかけつける。

他の白騎士も、ほとんどがこの流れにのって、ファルナ先輩を追い始めた。

だが、俺にはあの人が単に逃げているとは思えない。

俺は本陣の部隊を引き留め、この隙に別の場所へと移動するよう指示した。

「ファルナ、いつまで逃げるつもりだ！」

逃げてばかりでは私に勝てないぞ！」

ユウキ先輩や本陣の大半がファルナ先輩を追い立てている。

白騎士団が紅騎士団を囲むような形になっており、見た目はかなり白騎士団が優勢のように見える。

だが、見通しの悪い木立を抜けた所でファルナ先輩は振り返り一斉に号令をかける。

「突撃！」

木立の中から伏兵が現れ次々と白騎士団をうち倒していく。

大仰な重歩兵が本隊として、人目を引きつけている間に軽装の兵を伏兵として配置しておいたのだ。

実際、紅騎士団の本隊はよくみると、白騎士団の本隊に比べて人数は半数ほどしかないなかった。

「くっ、この程度！」

ユウキ先輩は健闘しているが、多勢に無勢。早く決めなければ。

「ユウキ、あなたにしてはずいぶん……。」

おかしいわね、敵の数が少なすぎる……。」

ユウキ先輩を予想以上に追いつめていることにファルナ先輩は疑問を持っていったようだ。

ドーン！ドーン！ドーン！

その時、勝負の終了をつげるドラが鳴り響く。

「なっ！」

ファルナ先輩もユウキ先輩も驚いて辺りを見回す。
そこには、本陣で紅騎士の旗を落とした俺がいた。

「あの子、ユウキを囮にして本陣を落とすなんて……。」

ふふっ、私を二度もまかすなんて、侮れない子。」

ファルナ先輩ににらまれたような気がするが、この距離からはもちろん、顔が見えているわけじゃない。
き、きつと気のせいだろう。

そうして、今回の模擬戦は終わりを告げた。

第六章：反逆者

勝敗を告げるドラが鳴りやみ、両騎士団が演習場の中央に集まった。

この後、レルアレーゼ神王による表彰の儀がある。

「勝者、白騎士団！」

模擬戦の勝敗をつげる審判員の宣言が行われる。同時に、周りの観客から拍手喝采が鳴り響く。

「負けたわ、ユウキ……。」

ファルナ先輩がユウキ先輩の元によって声をかける。

「ふふっ、私だけでは君にかてなかつたさ、ファルナ。カナートが私の足りない所をよく補ってくれた。」

ユウキ先輩が俺を褒めてくれている？
だとしたらちよっとうれしいな。

「では、白騎士団の団長、ユウキ・ミツカセは前へ！
神王レルアレーゼ様への謁見が許可される。」

審判員がユウキ先輩に向かって告げる。
これより、神王直々にお言葉が頂ける。

「はっ！」

ユウキ先輩は返事をして、演習場から
王侯の観覧席へと続く階段を上っていく。

王侯の席でのやりとりはこちらからは伺えない。
騎士団長のみが、神王と謁見できるのだ。

だが、しばらくしてもユウキ先輩が帰ってこない。
しかも、何故かファルナ先輩が呼び出されていた。

「紅騎士団の団長、ファルナ・ファルシオン！
神王陛下がお呼びだ。新王の間へと参られよ。」

「は、はっ！」

ファルナ先輩も少し驚いた様子で、ユウキ先輩と同じように階段を
上っていく。

おかしい・・・今まで見てきた模擬戦では敗者の騎士団長は
神王との謁見することはなかったんだけど・・・。

ファルナ先輩が王侯の席へと行ってからしばらくすると
突如、ドラの音が鳴り響く。

ドンドンドンドン！ドンドンドンドン！ドンドンドンドン！

これは・・・この音は、緊急招集を告げる音だ。

敵の奇襲や内乱の発生時にしか使われない、有事の際の合図だぞ？

すると、階段から駆け下りてくる人影が見えた。

よく見るとユウキ先輩だが、白騎士団の鎧は紅く染まっていて・・・

そう、あれは血の色だ……。

「ユウキ先輩！どうしたんですか！」

俺はユウキ先輩にとっさに声をかける。

「か、カナートか……。

ふぁ、ファルナが……ファルナが……くっ！」

話し終える前に、階段の奥からさらに神王の警備兵がやってくる。なんだってんだ、一体！何が起こっている！？

「カナート、私に関わるな！」

そういつて、ユウキ先輩は俺をおいて、階段を降りていく。

なんだよ、何だって言うんだよ！

「反逆者ユウキ・ミツカセを捕らえる！

捕らえた者には神王陛下より恩賞が授けられる！」

後ろの警備兵がそう叫びながら追いかけているのが聞こえた。

ユウキ先輩が……反乱？

ワケがわからない、なんだってそんなことになっているんだ！？

「ユウキ先輩、まっってください！」

とりあえず、俺はユウキ先輩から話を聞きたくて後を追った。

短くとも一緒に戦った仲間として、ファルナ先輩と共に戦い、勝利を収めてきた。

その中で見ていた彼女は、まじめで実直で、ひたむきで・・・とても、反逆罪で追われるような人には見えなかった。

何か誤解があるのかもしれない。まずは話を聞いておきたい。

俺はユウキ先輩の後を必死で追いかけていく。これが、全ての始まりだった。

第七章：矛盾した罪

ユウキ先輩に追いつき、寂れた廃屋の片隅で警備兵をやりすごしながら

彼女が追っていた傷の手当てをしていた。

「ユウキ先輩、一体何があったんですか！

こんな・・・こんな怪我までさせられて・・・。」

「カナート・・・私に・・・かまうな・・・。」

「駄目ですよ！俺はユウキ先輩が神王陛下に

勝利をたたえられるまでは、白騎士団の一員です。

団長がこんな姿になって、見捨てたとあつては騎士の名折れですよ。」

「カナート・・・まったく・・・君は・・・。」

俺のへりくつをユウキ先輩は笑って受け入れてくれた。

「私が・・・反逆罪というのは、本当なんだ・・・。」

神王の・・・神王陛下の命令に逆らってしまった。

だから・・・だから追われるのは仕方ないんだ。」

ユウキ先輩の口から聞かされた驚きの事実。

彼女が、神王陛下の命令に逆らった・・・？

だが、まで・・・何かがおかしい・・・。

「ちょっと待ってください、ユウキ先輩。」

あの場は、ユウキ先輩の勝利をたたえるための場で、命令をあ場でされるってこと事態、不自然じゃないですか。それに、命令に逆らったって、冒涇罪ぐらいですよ、普通は。それだけで反逆罪っておかしいですよ！」

何なんだこれは・・・何が正しくて何が間違っているんだ？俺はわけわからなくなっていた。

「ふふ・・・カナート、君は物事をよく見ている。やはり、君は優れた騎士になれるさ。」

こんな所で私にかまっけてはいけない・・・。」

ユウキ先輩は俺の答えをはぐらかしている。

「ユウキ先輩、言ってください。」

あの場で何があったのか。」

「・・・すまない、カナート。」

私の口からそれは言えない・・・。

言つべきではないんだ・・・彼女を裏切れない・・・。」

一体、何が・・・何のことをいつているんだ・・・。

「カナート！」

ここにいたの！一体どうなってるの！？

あなたもユウキ先輩も、反逆罪で捕まえろって、みんな言ってる！」

セルフィアとマルミが、駆けつけてくる。

ここは三人でよく遊んだ場所だから、ここに隠れているって

すぐにわかったようだ。

この二人に見つかるとは、ここも危ないな……。それにしても、俺まで反逆罪かよ……。

「セルフピア、マルミ。」

おまえ達までかかわるな。

俺はユウキ先輩をつれて、この国をでる。」

「な、何を！」

みんな驚きの顔でこちらを見る。

「だって、反逆罪とか、もうどうにもならないでしょ。捕まったら死刑ですし。」

自分が相応の罪を犯したのなら潔く捕まりますけど、そうでない限り、俺は逃げ続けますよ。

もちろん、ユウキ先輩も連れてね。」

俺は、ユウキ先輩の方を担いで立ち上がる。

「まったく、君は……。強いな……。」

ユウキ先輩は少し気弱につぶやいた。

普段は精悍な顔つきのユウキ先輩がここまで気弱になるなんて……。一体何があったっていうんだ……。

「わ、私もいくよ、カナート！」

セルフピアが、俺についてこようとす。

「セルフィア、君は帰れ。
ユウキ先輩は俺が付きそう。」

「そつ、そんな！わ、私もカナートと一緒に……。」

「聴くんだ、セルフィア。」

俺達と一緒にいたら、おまえまで反逆罪になってしまつ。
反逆罪っていうのは、国に敵対するってことだ。

この国に住んでる、おまえの家族やファルナ先輩と戦つてこと
だぞ？」

「か、カナート……でも……私……。」

「何をしている、さつさと行け！

マルミ、セルフィアを頼む。」

マルミはちよつと泣きそうな顔をしていたが、ぐつとこらえて答える。

「わ、わかった。セルフィアは私にまかせて。

カナートも……無茶しちゃだめだぞ……。」

「わかつてる。さあいけ、二人とも。」

俺は二人を促し、逆方向にユウキ先輩と歩き出す。

「うっ……ごめんなさい……。」

私、姉様を説得するから……。」

ユウキ先輩を助けてもらえるように……。」

セルフィアはマルミにつれられ、泣きながら去っていく。途中、マルミが振り返って話かけてきた。

「カナート……、また……あえるよね……？」

「ああ、絶対だ……。」

「うん……絶対だよ……。」

そういつてマルミはセルフィアをつれて帰っていった。

「さあ、ユウキ先輩、俺たちも行きましょう。」

「か、カナート……君だけでも……逃げる……。」

私は怪我をしているし……足手まといになる……。」

ユウキ先輩は体に数力所切り傷がある。

今は適当に止血して、何とかなっているが普通なら絶対安静の所だろう。

「生憎、俺はセルフィア程、聞き分けはよくないんです。

ユウキ先輩は助けてみせます。」

「何故……何故そこまで、私を助けようとする？」

君にそこまでの義理は……ないはずだ……。」

ユウキ先輩は俺につれられ、ふらふらと歩きながらそう言った。

「そうですね……ユウキ先輩が極悪人で、

殺されても当然の人なら、俺だってこんなことしません。」

でも、そうじゃない。あなたは何も悪くない。そして、あなたは死ぬべき人じゃない。だから、です。あなたが、こんなことで殺されるなんて、何か、俺にとっては矛盾してるんですよ。」

あの無邪気で、清廉なユウキ先輩が、あの一瞬で反逆罪として処刑される。そんな矛盾があっというわけがない。

「む、矛盾してるって……？」

「そう、だから、俺はその矛盾を正すだけ。」

そのために、ユウキ先輩は助けて見せます。」

「ふふっ、君も……おもしろいことを……。」

ユウキ先輩は、本当におかしそうに笑っている。

その笑いには、どことなく安心した所も見られる。

ユウキ先輩も、一人で反逆罪に等されて、不安に違いないのだろう。

「さあ、行きましょう。」

「……負けたよ、君に任せる。」

だが、いざとなったら降伏しろ。

分家とは言え、君も、エスシオルの名を冠する者。

私に脅されたとも言え、罪は免れよう……。

「はいはい、そういうことしておきます。」

でも、俺が降伏する時は、ユウキ先輩が助かる時だけですから。」

「君って奴は……。」

ユウキ先輩はあきれたような、でも俺を頼るような、
そんな目で俺をみつめて、観念したように歩き出した。

第八章：決行前夜

デイ・ラオール神国と隣接している国は3つ。

船があれば海路という選択もあるが、

神国の港は密輸を取り締まるためにも警備がかなり厳重になっている。

そこに、反逆者の知らせがくればどれほどの警備になるかわからない。

よって、陸路から魔皇国バレス、ブリトニア皇国、トルアノ連邦のいずれかの国に亡命する方が、まだ安全と言える。

魔皇国バレスと神国は敵対関係にあるが、あそこは魔族が住まう魔境の地。

人のみでは受け入れられるとは思えない。

となると、ブリトニア皇国かトルアノ連邦のいずれかになる。

距離的にはどちらも変わらないが、ブリトニア皇国と神国は

敵対関係ではないものの、軍力を牽制しあう微妙な膠着状態にあり国境間での警備も厳重になっている。

それよりは、行商人が多数行き交うトルアノ連邦との国境が越えやすい。

そういうわけで、俺とユウキ先輩は人目をさげ南へと進んでいった。

関所をさけて進めば国境付近まではそれ程苦もなかつたり着くことができた。

後は国境警備隊の監視の中、どうやってここを越えるか、だ。

周囲の警備状態を確認しながら、国境付近で野宿をする。

ユウキ先輩の怪我の手当もちゃんとしたいし、早く国境を越えたい所だが……。

その時、西の空に狼煙が上がっているのが見えた。

軍隊の連絡用で使われることがあるが……追っ手が迫っているのか？

だが、よく見ると、これは軍事用で使われるいずれとも異なる。

これは……だが、まさか……。

「どうしたんだ、カナート……。

あの狼煙、意味がわかるのか？」

ユウキ先輩が俺の表情をみて、何かを感じ取り問い掛ける。

「いや、でも罨だと思いません。

さすがに、ここまで来てないと思うし。」

「どづいつことだ？」

俺はユウキ先輩に事情を説明する。

「あの煙、俺とマルミが昔つくったオリジナルの狼煙なんですよ。

ほら、普通の軍隊の奴より、同じ場所の煙が1つ多いでしょう？

まだ士官学校に入る前に、見よう見まねで考えた奴です。

正規の奴で解釈すると意味がめちゃくちゃになるんですけどね。」

「マルミ……ああ、最後にきていた子か。

その子はなんて言ってるんだい？」

「えっと、そんな詳しい情報が伝えられる奴じゃないんですが、

今上がってる奴だと、明日の正午決行、って意味になりますね。疑問系なので、決行してもいいか？という感じでしょうか。」

マルミとセルフィアは、きつとあの後俺達とあったことがばれてしまい、

何らかの形でこの手段を聞き出されたのだろう。

無事でいてくれればいいんだが……。

「カナート、決行つて言うと、マルミという子は何をやる気なんだろうな。」

ユウキ先輩はしばらく考え込んでいたかと思うと、突然そんなことを言い出した。

「だって、たぶんあそこにマルミはいませんか？

これ神国側の罠ですって。

返事を返させて居場所を特定する気ですよ。」

「カナート、君らしくない。冷静に考えるんだ。

私たちは追っ手の目を逃れながらとは言え、

乗り合いの馬車を利用してかなりの早さでここまで来た。」

確かに、俺達はここまでではかなり順調にきた。

神国は人通りが多いため、途中の道はそれ程警備が厳しくない。

「いいか、私たちと別れたマルミちゃんが、

あの後、仮にすぐに私たちと一緒にいるのが見つかったとして、だ。

そこから、あの狼煙のことを話すのに、どれだけの時間があると
思うっ？」

そうか、俺は狼煙の存在を知っているからいいが、普通はそういうものがあるとは思わない。もっと他のことを聞き出そうとする。

狼煙のことなんて、自ら積極的に話そうとしない限り、聞き出そうとしても、聞き出せるような内容ではない。

「あの子は自ら進んで、カナート。君を売り渡すような子なのかい？」

「そうでないのなら、あの狼煙は、真実だと思うんだけどね。」

ユウキ先輩の言いたいことはわかった。

この短期間の間に、マルミから狼煙の存在を聞き出し、俺達の逃げる場所をある程度推測し、そこに狼煙を上げる。こういったことを行うためには、俺達と別れてすぐにマルミからこの情報を聞き出す必要があるだろう。

だが、すぐに聞き出せるような内容ではないし、となると、マルミが自発的に話さない限りこの早さで狼煙は上がらない。

マルミはおちゃらけてはいても、裏では一本芯の通ったところがある。

友達を簡単に売り渡すようなことはしないだろう。

「マルミは信用できます。」

「すいません、よく考えればわかることでした。」

「あの狼煙、信じて良いと思います。」

「うん、そうだろう。誠実そうない子だったしね。それで、話は戻るんだけど、あの決行の意味する所なんだけど君はどう考える、カナート。」

マルミが、あそこで狼煙を上げている、ということとはだ。彼女はあその後、何らかの事情があつて神国を抜け出した。

別れる間際、セルフィアはファルナ先輩にかけあつてユウキ先輩の罪を許してもらおうよう、話をすると言つていた。マルミもセルフィアにつきそつて、行動していただろう。

だが、ファルナ先輩はあの場にいたので、ユウキ先輩の罪がどういふものは知っているだろうし、その上でユウキ先輩は追われている。

ユウキ先輩はあの場で何があつたのかは、未だに話してくれないが恐らく、ファルナ先輩にもどうしようもなかったことなのだろう。

ファルナ先輩でも無理だとわかつた二人が、その後どういふ行動をとるか。

マルミが、後を追つて助けよう！と言い出してもおかしくはない。

国境を越えることは話していたから、ある程度この場所も想像はできただろう。

そして、この場所で狼煙をあげたということとは、俺達が国境付近で足止めをくらつていている、ということを考えて上で、だ。

そうになると、考えられるのは俺達が越境するための何かだろう。

「マルミが何をするかまではわかりません。」

ですが、マルミは明日の正午に、俺達に国境を越えろ、とっているんだと思います。

「うん、やはりそうなるか。」

わかった、私たちもそのつもりで準備はしておこう。」

決行・・・か。

早まったまねをしなければいいんだけどな・・・。

俺はマルミの後先考えない性格に、一抹の不安を覚えながら返事の狼煙をあげていた。

第九章：越境

正午、俺とユウキ先輩は山の中から
国境付近の詰め所が見える場所に陣取り、その時をまっていた。

ちよつと日が真上に昇ろうかというその時、
警備兵が慌ただしく騒ぎ出した。

「反逆者のユウキ・ミツカセが見つかったらしい！
ここで捕まえればお手柄だぞ！」

そついつて警備兵の一人が声を上げている。
すぐに周りの警備員が騒ぎ出す。

反逆者を捕まえれば、かなりの報償がでるはずだ。
警備員の眼の色が変わるのが、ここからでもわかる。

「おい、俺達もいくぞ！
西砦の奴らに手柄を横取りされてたまるか！」

俺達がいま見てるのはトルアノ連邦とを結ぶ関所の東側になる。
もう少し離れた所には西の関所があり、そこにも砦があつて警備兵
が待機している。

ああ……よく見れば、あの最初に声をかけた奴……

兵士があらかたいなくなつても、最初に
反逆者の知らせを告げに来た者は残っていた。

まったく、危険なまねをしやがつて……。

「ユウキ先輩、いきましようか。」

「ちょうど、警備兵もいなくなったようですし。」

「ふふっ・・・そうだな。」

「マルミちゃんも、なかなかやるものだね。」

「あいつの前ではそういうこと、言わない方がいいですよ。すぐ調子にのるから・・・。」

「ふふっ、なるほど、気をつけよう。」

「そういつて、俺とユウキ先輩は足早に最後に残った警備兵に近づく。」

「おい、マルミ。」

「は、はにゃっ！」

「な、な、な、なんだ・・・カナートか・・・。」

「び、びっくりさせるなよう・・・。」

「マルミは俺が声をかけただけで、飛び上がるようにびっくりしていた。」

「まあ、警備兵だまして連れ出すなんて、平気な顔してやられても困るけど、」

「ずいぶん無理してがんばってくれたんだな・・・。」

「さあ話は後だ。」

「いまのうちに関所を抜けよう。」

ユウキ先輩に促されて俺とマルミは関所を一気にかけぬける。無人の関所を越えて、トルアノ連邦に入り、しばらく距離をかせいだから

俺達は少し休憩をとることにした。

「まさかとは思ったけど、本当におまえがいるとはな、マルミ。」

俺の問い掛けにマルミは少しばつが悪そうに笑う。

「にやははは……。」

なんていうか、成り行きでねえ……。」

「セルフイアはどうなったんだ？

無事なのか？」

てつきり、二人で来ていると思っていたのだが関所にいたのはマルミ一人だった。

「うん、セルフイはファルナ先輩ともう少し話をしたいんだって。

でも、カナート達が捕まっちゃうとまずいからさ。

私だけでも行くよっていつて、でてきたんだ。」

マルミは、士官学校に通ってはいるが、騎士ではなく

楽隊の方に志望している。そのため、軍事的な訓練はほとんど受けていない。

そんな中で、ああやって一人で行動するのは、すごく勇気のいることだと思っぜ。」

「まったく、一人でおまえは無茶すぎだぞ……。」

「にははは……。
でも、助かったっしょ？」

マルミは満面の笑みを浮かべてそう答えた。

「ちえっ……まあそれなりにな。」

「にははは、結構結構。」

カナート君、お礼はトルアノ名物、ハシゴ饅頭で手を打とうじやないか。」

マルミの頭の中は、もう首都トルアノについて、銘菓を食べることに切り替わっていた。

まったく、切り替えの早い奴……。

「おまえまで、こんな目にあうことなかったのにさ、
まったく、馬鹿な奴。」

「にははははは……。
ま、まあ長い旅行だと思えば、これもまたよし、ってね。」

「ははっ、長い旅か……。
マルミちゃんの良いことを言うね。」

ユウキ先輩はマルミのことが気に入ったようだ。
頭をなでなでして、かわいがってあげている。

「ちよ、ちよっとユウキ先輩……。
あまりマルミを甘やかさないでくださいよ。」

「にはやはは、妬いてるのかな、カナート君。ほれほれ、うらやましかろう？」

マルミは頭をなでられて上機嫌のようだ。まったく、甘やかせるとすぐこれだ……。

「ほら、先を急ぐぞ。」

今日中にアリトナ村には着いておきたいからな。」

アリトナ村は国境のすぐ近くにあるトルアノ連邦の小さな村だ。とりあえずはそこで、ユウキ先輩の手当をして傷が治るのを待ちたい。

目の前に広がる平野の先には、ゆったりと人家が放つ明かりが見えていた。

第十章：開戦

俺達三人はアリトナ村の宿にとまり、一夜を明かした。村でもらった薬のおかげもあり、ユウキ先輩の体調もだいぶよくなった。

「ユウキ先輩、どうです、体の方は？」

ユウキ先輩はベッドからすぐ抜け出そうとするので俺とマルミが交互で様子を見ては、声をかけていた。

「ははっ、傷口はもうほとんどふさがっているからな。疲労もとれたし、もう大丈夫さ。」

いつも、ユウキ先輩はそうやって強がりをするのだけど、今日は本当に体調がよさそうだ。だいぶ良くなったように見える。

「ホント、一時はどうなるかと思いましたが、何とか乗り越えましたね。」

「まったく、君にはいろいろと助けられた。ありがとう。改めて礼を言わせてくれ。」

ユウキ先輩はベッドの上に座ったまま、こちらに頭を下げる。

「よしてくださいよ、ユウキ先輩、俺は、何もしてませんってば。マルミの件だって、ユウキ先輩の助言がなかったら、国境すら越えられませんでしたよ。」

「いや、本当に感謝しているんだ、カナート。
ありがとう、私を助けてくれて。」

ユウキ先輩のまっすぐなまなざしに見つめられ、俺は照れくさくて目を背けてしまう。

「まいったな、ユウキ先輩にも……。」

それを聞いて、ユウキ先輩が思いたしたようにいった。

「ああ、それと、もう私に先輩は付けなideくれないか。

ここは士官学校ではないし、君は私の命を救ってくれた恩人であり、戦友だ。

君とは対等な立場でありたいと願っている。」

「わ、わかりました、ユウキ……。」

……やっぱ、ユウキ先輩でいいですか？

対等でも、一応年上だし……。」

ユウキ、とか呼び捨てにするなんて、俺には無理だな、絶対。

「ふふっ、わかった。

とりあえずはそれで譲歩しておこう。

ただ、いつでも呼び捨てにしてくれてかまわないからな。」

「ええ、時間はかかるかもしれませんが……。」

「ははっ、それで十分さ。

そういえば、マルミちゃんはどこにいったんだい？

てつきり二人一緒にいるのかと思ったんだが。」

マルミは俺を捜しにでていったそうだが、どうも入れ違いになったようだ。

「どこかで、つまみ食いでもしてるんじゃないですかね。」

「ははっ、それはひどいな、カナート。」

マルミちゃんだって、いつもいつも、食べてばかりじゃ……。」

その瞬間、ドアが勢いよく開いてマルミが飛び出してくる。

「た、た、たいふえんらー!」

な、何をいつているのかよくわからない。

口の中が、アリトナ村の名産、月の輪メロンでいっぱいになっている。

「マルミ、食べきってからしゃべった方がいいぞ……。」

マルミは慌てて、口の中をもぐもぐしてる。

「ふお、ふおんなことひってる場合じゃないんらよ!

きたきた、きたんらよ!」

マルミが食べきらないうちから大慌てで話し出す。

「何が来たって言うんだ?」

俺とユウキ先輩はマルミの慌てぶりに首を傾げる。

「神軍だよ！神軍が攻めてきたんだ！」

「な、なんだって!？」

神軍、つまりデイ・ラオール神国の部隊が、ここトルアノ連邦まで？俺達を追うためだけに国境を侵すとは思えないが……。

「いま国境を越えて、大軍がこちらに向かってるって！
ここ、戦場になっちゃうよ！」

まずい、国境を越えるはずがないと油断しすぎた。
今から逃げ出しても、そう遠くまでは逃げられない。
だが、俺達だけで軍隊に立ち向かえるわけではないし……。

「カナート、この村の戦力がどれだけあるか、わかるか。」

ユウキ先輩は戦う場合の勝算を考えているようだ。

「馬が10頭、武器は武器庫みたいな所があったので
それなりに、そろっんじゃないでしょうか。
戦えそうな村人は全員が集まったとしても
100人いくかどうかってとこですかね。」

俺はここにくる時、村を見ていて
覚えている範囲で話す。

「なるほど、さすがに真っ向から戦うことはできないな。
さて、どうするか……。」

神軍の狙いは何か、それを考えなくてはならない。

俺達を始末するために国境をこえた？それはないだろう。

確かに、国境で一波乱起こしてからきたので、俺らがアリトナ村から首都トルアノに続くいずれかの村や町にいることは容易に想像できる。

だが、だからといって、盟約を破棄してまで、友好関係にあったトルアノ連邦に攻め込むことはあり得ないだろう。

俺達を引き渡すようトルアノ連邦に要請した方が、よっぽど効率的だ。

神軍にはきつと別の狙いがある。

俺達のまだ知らない理由が……。

第十一章：戦いの決意

アリトナ村の人々は、勝てる見込みがないのを知って知らずか、徹底抗戦の構えで、村に立てこもるつもりのようなのだ。

すでに、デイ・ラオール神国から、トルアノ連邦に対して一方的な宣戦布告が行われているようで、トルアノ連邦からはまもなく援軍がくるとの知らせがあり、それがくるまで持ちこたえる、のだそうだ。

「神国と、トルアノ連邦が戦争を始めることになるなんて・・・。

俺達は、俺達はこうするべきでしょう、ユウキ先輩。」

アリトナ村には少なからずお世話にはなつたし、

亡命して行き場のない俺達にとって、この場所を守りたいという思いはある。

だが、相手は神国だ。俺やマルミの生まれ故郷であり、家族や多くの友人が住まう国である。

神国と戦う、ということとは、それらの人たちを敵にまわすということだ。

「カナート、私は常に義に従い生きてきた。

今回も、それに従うつもりだ。この戦い、大義はどちらにある？

私は義のある方と共に戦う。」

大義がどちらにあるか。もちろん一方的な宣戦布告をした神国に義はなく、そこから人々を守るトルアノ連邦に大義はある。

目的はわからないが、現状では神国の戦いは、単なる侵略でしかない。

「俺もここで神国と戦います。」

「ここで逃げたら、一生逃げ続けなきゃいけない気がする。」

「そうか、君も一緒に戦ってくれるなら心強いよ、カナート。」

「それでは私たちがどう戦うべきか考えようか。」

「このままでは、アリトナ村は、援軍がくる前につぶされてしまうからね。」

ユウキ先輩は紙をひろげて、この付近の地図を書いていく。

「敵は、エルフランから国境を越えて、アリトナ村にまっすぐ向かっている。」

「迎え撃つのはそうだな・・・ここがいいかな。」

「そういつて、国境とアリトナ村の中間付近を指さす。」

「この林で奇襲をかけるのがいいだろう。」

「道も狭いし、人数差による不利が目立たない。」

「一般的に、騎士位が1つ上がると10倍の戦力が必要と言われる。」

「小騎士一人に10人、その上の英騎士一人だと100人。」

「ユウキ先輩のような公騎士は一人で1000人分の戦力になる。」

「ただし、神国は世界で最も騎士位を持つ者が多い国だ。」

「攻めてくる部隊にもある程度の騎士位をもつものがあるだろう。」

「そういう意味でも、できるだけ相手にする兵は少ない方がいい。」

「ふんふん、なるほどなるほど。」

気が付くとマルミがよこでうなずいている。

「おまえ、いつのまにあらわれたんだ？」

「にははは。」

ねえこれ、村の人たちにも話して良いよね？」

「そうだね、私とカナートだけだと心許ない。

村の人たちが協力してくれると助かるけど

私たちの言うことを聞いてくれるかどうか……。」

村の人と多少の交流はあっても、俺達は余所者だ。

そんな奴と一緒に戦ってくれるかどうか……。」

「にははは、さっき村長さんと意気投合しちゃってさ。

こう、うちのユウキ先輩は公騎士さんだから、

神国とか、ばったばった倒しちゃいますよ！っていつちやったん

だ。」

忘れてた……マルミは誰とでもすぐ仲良しになれる奴だった。

っていうか、勝手にマルミの中では俺達は神国と戦うことになってたらしい。

祖国と戦うんだから、もうちょっと悩もうぜ、マルミ……。」

「ふふつ、なかなか頼もしいね、マルミちゃんは。

それじゃ、村長さんにも話しておいてくれるかな。

最初の防衛地点は、さっきもいついたこの林のある場所。

ただし、不利になったら、この橋の所まで下がる。

最後は村の入り口かな。」

ユウキ先輩は国境からアリトナ村の間で防衛できそうな地点を3カ所決めた。

これ、国境からここまで逃げてくる間にユウキ先輩に言われて休憩をとった場所だ。

たぶん、追っ手がきた場合に迎撃しやすい場所で休憩をとっていたんだな。

それが、ここでいきってくるとは……。

「ほいじゃ、村長さんに話して村の人たちにも動いてもらっね。いつてくるっ！」

マルミは元気よく飛び出していった。

「それじゃ、俺達も準備していきますか。

最初の防衛地点まで行くには、そのんびりもしてもらえないですよね。」

「そうだね、行こうか。」

そうして、俺達の最初の戦いが始まった。

第十二章：アリトナ村防衛戦

林道に陣取り、身を隠して敵を待つこと1時間。
道の向こうに土煙と共に大軍が姿を現す。

「かなりの数ですね・・・一個連隊ぐらいでしょうか・・・。」

「そうだね、連隊クラスだと英騎士が一人はいるかもしれないな。

英騎士がいたら私が相手をするから、その間、他の兵はカナート、君に任せるよ。」

「が、がんばってみます。」

「不利とわかつたら橋の所まで退くんた。

決断が遅ければ、それだけ被害も大きくなる。

判断は頼んだよ。私は戦いでそれどころじゃないと思うからね。」

この戦い、戦力と言えばユウキ先輩頼みと言えるのがつらい所だ。

俺達は林道を挟むように散開し、林の中に身を隠す。

やがて、遠くの土煙は次第に人の姿へと形を変え、鎧姿が黙視できるようになってきた。

「き、きた・・・。」

敵は速度をゆるめることなく林道に向かって迫ってくる。

大勢の人が放つ熱気のせいだろうか。少し周りの温度が上がってきた気がする。

俺の汗がスルリと、流れ落ち、その音で気づかれないかと、ハラハラする。

「まだまだ・・・まだ引きつけて、敵の半分が林道に入るまでは待つんだ。」

ユウキ先輩ははやる俺に小声でそう促す。

林の陰に隠れている俺達には気が付かず、敵兵が林道を進んでいく。幸いにも彼ら自身が放つ大量の足音や雑音のせいで、多少の物音はかき消される。

「いくぞ、放て・・・！」

敵の半数が林道にさしかかった所でユウキ先輩が号令と共に突撃する。

村人達が大量の弓矢を放ち、林道に沿って細長くのびた敵兵を各個撃破していく。

とたん、すさまじい衝撃と共に林道を兵士達が転げ落ちていく。

平坦な林道を転げ落ちる、とはおかしな表現だが、これが公騎士であるユウキ先輩の力だろう。

公騎の位を授かる者は、重力を操ると言われている。これが、公騎の力・・・。

林道の兵士達は次々と転げ落ち、はたまた弓矢で倒れ、林道に入った兵士の半数以上がかなりの手傷を負っているだろう。

「ユウキ先輩、徐々に敵からの反撃を受けるようになっていきます。そろそろ退きましよう。」

敵も奇襲の混乱から立ち直りつつある。

冷静に、軍団を組織して立ち向かわれたら一気に形成は不利になる。

「わかった、よしみんな退くぞ！」

撤退合図として簡易祝砲を3発放ち撤退を告げる。

村の人たちはみんな、林の中は庭のようなもので、すすいと進んでいく。

俺とユウキ先輩は村人の後をついていく。

林をぬけて、少しいくと次の迎撃地点である橋まで付いた。

アリトナ村の近辺に流れるラン・ランドルフ川は海まで続く河川で流れも速く幅も広い。また、水門が近くにあるので

川を渡るうとしたときに開け放てば、敵を一気に下流まで流すことができる。

橋の付近には俺とユウキ先輩がたち、

村人は川を渡ってくるものがいれば弓や槍で迎撃する。

にらみ合いのような形で時間がつぶせればいいんだけど、どうなるか。

しばらくすると、林を抜けて敵が迫ってくる。

元の数が多すぎるせいもあるが、敵の数はあまり減ったようには見えない。

そのままこちらまで迫ってくるかと思っただが、手前で軍の歩みが止まる。

しばらく相手の出方を伺っていると、白旗をあげた騎兵が一騎、こちらに近づいてくる。

白旗っていうことは、使者っていうことになるんだけど、何故このタイミングで？

「どういうことでしょうか、ユウキ先輩。
神国から使者をよこすなんて……。」

神国側からの使者といえ、降伏勧告ぐらいしか思いつかないが
奇襲でやられた後にするのはお粗末すぎる。
別の意図だとは、思うけど、それが読めない。

「確かに、相手の意図はちょっと読めないな。
とりあえず話を聞いてみるしかないね。」

ユウキ先輩も使者の意図はわからないようであった。

俺達は、ゆっくりとこちらにせまってくる白旗を複雑な気持ちで見
つめていた。

第十三章：蒼騎士団の報せ

橋のそばまで白旗を掲げた騎兵が近づいてくる。
俺とユウキ先輩は警戒しながらそれを待ちかまえる。

馬に乗っている男は、割と歳を食った、屈強そうな男だ。
使者って言うより、刺客って言われた方がまだ納得できる。
使者は川のそばまでくると馬を下りてこちらに近づいてきた。

「俺の名はウィルド・ランボルク。」

「デイ・ラオール神国蒼騎士団の第三師団長を務めている。」

その使者と思われる男はそう名乗った。
蒼騎士団ってのは聞いたことないが、師団長っていえばそれなりの
地位だぞ。

恐らく、このアリトナ村に攻めてきている部隊の指揮官じゃないか。
神国の師団長といえば、当然騎士位を持っているだろうし、
刺客というのも、あながち冗談じゃないかもしれない。

ユウキ先輩はその男のそばにいき、応える。

「使者の御用向きはなんでしょうか、ウィルド殿。」

「がっはっは、あんたがユウキちゃんか。」

なかなか、勇ましい顔しているな。」

途端、男がユウキ先輩になれなれしく話しかける。

ユウキ先輩の知り合いつてわけでもなさそうだが……。

「アリトナ村の方面で公騎の力を持つ者がいれば、それはきつと、亡命したユウキに違いないってな。なるほどなるほど、その怖い顔を見ると、アタリみたいだな。」

そうか、俺達がアリトナ村方面に亡命したことはわかっていし公騎の力を持つ者は、神国以外ではそんなに数はいない。トルアノ連邦では数名しかいない公騎の力を、辺境の村で使うものがいれば、

それは亡命したユウキ先輩に違いない、というのは想像に難くない。

「そんなことを言うためだけの使者だというのはですか？」

「そう怖い顔するなよ。まあなんだ。俺の用はあんたじゃない。あんたはつぶせって言われてるからな。」

それより、ユウキちゃんがいるなら、カナートって小僧もいるだろう。

そいつと話したいんだが、いるか？」

「お、おれ？」

とっさの呼びかけについ、反応してしまう。

「ばか、でてくるなカナート！
隠れている。」

「ユウキちゃんさ、そうどなるなって。」

俺はなにもしねえよ、ちよつと話をさせてくれればいいんだ。戦いになったら、公騎のあんたはともかく、あの坊主とか

一瞬ではねちまいそうだからな。その前に、伝えておかないとな。

「

ウィルドと名乗った男は不適な笑みを浮かべ、俺の顔を見ている。

「さあ、そんなとこつたつてないで、こつちこいよ。」

「カナート、下がっている！

話は私が聞いておく！」

ここしばらく、冷静だったんだけど、ユウキ先輩が最初にみた時のように感情的になる。

いつもはすごく冷静で戦いの場面でも、それは変わらない。

でも、何だったか・・・そうファルナ先輩の前では驚く程に感情的だった。

彼女のの前では、冷静なユウキ先輩はポロポロと素顔がこぼれ落ち、ああこの二人は本当に仲がいいんだなあと感じたのを覚えている。

俺は少し迷ったが、あの男が何故俺に話があるのか。

その疑問がわいてきて、話を聞くことにした。

ゆっくりと、警戒しながらユウキ先輩と並び、ウィルドと名乗る男を見据える。

「あんたが、カナート・エスシオールで間違いないな？」

ウィルドと名乗った男はまるで俺を十年來の友のような、親しげな笑みで見つめている。

なんなんだ、この人は・・・。

「ああ、俺に話っているのは？」

「がっはっは、なに、おまえにとってはいい話だと思っぜ？」

おまえは神国の生まれだろ、祖国の兵士と戦っても平気なのか？」

「・・・何が言いたい。」

「はっはっは、そう怖い顔するなって。」

おまえさえその気なら、おまえにかかった反逆罪はちやらにしておまえ達、蒼騎士団の副長として迎え入れたいっていう話だ。」

「なっ！」

どういうことだ、俺を騎士団の副長？何をいつてるんだ、この男？

「俺達の蒼騎士団はおまえたちが亡命した後につくられたから知らないのも無理はないかもしれないがな。」

まあ神国では聖騎士団や征龍騎士団と並ぶ、でかい騎士団なんだぜ？」

「わざわざ、反逆罪がかかって、亡命している、士官学校すら卒業していない男を、

この戦いの最中に、副長として迎え入れる。」

そんな与太話を、俺が信じると、あんたは思っているのか？」

「がっはっは、なかなか冷静沈着。物事をよく見ている。」

じゃあ一つ、おまえが信じられる材料をやろう。」

俺達の騎士団長は、ファルナ・ファルシオン。」

おまえたちが亡命した後の話だが、星騎の叙任を受け、騎士団長に就任している。」

「ふあ、ファルナ先輩が・・・星騎士に・・・？」

「わかるだろう、星騎士といえば、神国では神王に次ぐ地位を持つ。おまえの反逆罪をちらにするぐらい、わけないんだよ。で、ファルナ嬢はどうにも、おまえさんのことを気に入ってるみたいでな。」

「何でも、ファルナ嬢を二度もうち負かしたらしいじゃねえか？」

「ファルナ先輩なら、あるいはそういうこともあるかもしれない。星騎の叙任が本当だとすれば、確かに反逆罪も、どうとでもなるだろう。」

「そもそもが、えん罪じゃないかとさえ思える、言われなき反逆罪でもあるのだから。」

「だが、ひっかかることがある。」

「俺だけなのか・・・？」

「ユウキ先輩の反逆罪も取り消してくれるのか？」

「ユウキちゃんのは駄目だ。そいつのは神王直々に下された反逆罪だからな。」

「星騎士といえども、覆せない。だが、カナート、おまえさんの反逆者に荷担したからっていうだけで、ついた罪だ。」

「それぐらいなら、ファルナ嬢の力でなんとかなるってわけだ。」

「ユウキ先輩は、神王の命令に逆らったから、反逆罪になったと言っていた。」

「話としては、それなりに筋は通っている。」

「だが、俺の答えはもうでている。とすれば、俺がとるべき行動は・・・。」

「あんたの話が信用できるか、もう少し詳しく話が聞きたい。」

「カナート、こんな奴の話の話を聞くな！」

「ユウキ先輩、しばらくこの人と話をしているんで席を外してもらえますか？」

「カナート！君は・・・君は・・・！」

ユウキ先輩はこうなると、いつもの冷静さがなくなる。気づいてくれれば良いんだけど・・・。

「ユウキ先輩、俺の中ではまだ矛盾したままなんです。それは、たぶん変わらないです。」

「えっ・・・？」

「それじゃ、ウィルドさんでしたっけ、いきましようか。」

俺は、疑問をもたれないうちに、ウィルドという男に話をふる。

「がっはっは、しかし、おまえさん、モテモテだな、おい。おじさん、うらやましくなっちゃうぜ？」

意外とにぶい人なのかもしれない。これなら大丈夫そうだ。

「そんなんじゃないですよ。それじゃ向こうのほうで。」

俺とウィルドは、橋を離れ、男が馬を止めた木陰付近まで離れる。男にできるだけ、不振に思われないよう話を聞き、時間をかける。ふと橋の方を見るとユウキ先輩の姿はもうなかった。さて、冷静さを取り戻してくれればいんだけど・・・。

「おい、もういいだろう。」

こんな所で長話してる場合じゃねえよ。

さっさと、本陣にもどろせ。ユウキちゃんとはとっくに戻ったみたいだしよ？」

男はとうとうしびれをきらしてしまったようだ。

まあこの辺りが潮時か。

「そうですね、それでは俺も自分の陣地に戻るとします。

次に会うときは、敵同士ですね。」

「あ・・・あん？」

おい、どういうことだよ？俺達とくるんじゃないかったのか？」

「一緒にいくつもりなら、すぐに本陣に戻りますよ。

こんな所で、相手につくかどうか迷って話を聞くなんて、ばかげてる。」

男はようやく目的に気が付いたようだ。

「くっ、くそ！」

てめえ、馬鹿にしゃがって！」

男がとつさに俺に斬りかかってくる。

まあ時間も稼げたし、ここで死ぬのも悪くはないか。

と思った瞬間、男の刃が、別の刃に止められる。

「神国の使者は、刃をふるうようにしつけられているのか？」

「ゆ、ユウキ先輩！」

「すまない、カナート。少し冷静になれたようだ。」

「そう・・・みたいで、よかったです。」

俺は後一步まで迫った相手の刃にひやりとしながら答えた。

「くっ・・・。」

ちえっ、わかったわかった。

俺のまけた。ここはおとなしく引き下がろう。」

男は遠目に見える、トルアノ連邦の援軍をめにし、あきらめたようだ。

「間に合ったようですね、援軍は。」

「まったく、君も無茶をする。」

時間稼ぎのために、あえて話を延ばすなんてな。」

「いや、思ったよりうまく行ってよかったです。」

俺も正直、駄目かと思ったところですよ。

ユウキ先輩が冷静になってくれて、よかったです。」

「ははっ、すまないな・・・。」

君には肝心なときにはいつも、助けられている。」

「俺は何もしてないですよ。運が良かっただけです。」

それに、本当に厳しくなるのはこれからですからね。

神国と、連邦が本格的に戦争を始めたらどうなるか・・・。」

援軍がきたおかげで、この場所に攻めてきた神軍は引き上げを始めたようだ。

だが、これで終わるとは思えない。

遠ざかる神軍と、近づいてくる援軍が奏でる軍蹄の音を聞きながら俺達は今後広がるであろう戦火を案じていた。

第十四章：濡れ衣

アリトナ村にかけつけたトルアノ連邦の援軍は、神軍が引き上げたため

守備兵を残して連邦の首都、トルアノへ帰還することになった。

俺達が村の防衛に協力したことは、マルミが仲良くなった

アリトナ村の村長を始め、多数の村人から連邦軍に伝えられた。

その結果、俺達は来賓として招待され、首都トルアノまで同行することになった。

まあ来賓といえは聞こえはいいが、俺達が神国からの

亡命者であることはばれているし、その辺で事情聴取等があるのだと思う。

俺達は援軍の将であった、フィリコ・フィルバレスという人に連れられて

連邦の最高権力者である、領王への謁見を行うことになった。

「フィリコ・フィルバレス、只今戻りました」

半円状に並んだ玉座に、連邦の領王達が並んで座っている。

座席毎に細かい席次があるらしいんだけど、詳しいことは覚えてない。

ただ、真ん中の人が一番偉かったと思う。

「うむ、ご苦労だった、フィルバレス將軍。

して、そちらの者達は？」

案の定、真ん中の席に座った年輩の男が真っ先に答える。

「はっ、国境沿いの村、アリトナに滞在していた旅人で、神軍が攻めてきた際、村人を救うために戦ってくれました。」

フィリコ將軍は、アリトナ村の人たちからの評判もよかつたし、案外、俺達を本当の来賓として迎えようとしているのかもしれない。

「彼らの働きで多くの罪なき民が命を救われました。」

今回の功労者です、なにとぞよしなに……。」

「わかった、その方らには後で恩賞を授けよう。」

して、フィリコ。前線の状態はどのようになっておる？」

「アリトナ村は無事でしたが、国境沿いの村々はほぼ敵の手中に……。」

防衛線を当初の予定より5km下げて正規軍を配備しました。」

アリトナ村以外にも連邦は立て続けに攻め込まれているようだ。半ば奇襲同然の宣戦布告であったので、仕方ないことだとは思う。

「そうか……ご苦勞であった。」

引き続き、貴公は主力を率い、神軍の侵攻に備えてくれ。」

「はっ！」

領王のねぎらいの言葉も終わり、フィリコ將軍が退席しようとしたとき、

領王の側にたっていた、側近らしき男が將軍に声をかけた。

「フィルバレス將軍、貴公に訪ねたいことがある。」

「何か御用でしょうか、サルターラ参謀。」

「一応、参謀らしい。まあいかにも悪巧みしそうな顔ではある。」

「貴公のつれてきた、その三人。」

「アリトナ村で集めた情報によると、デイ・ラオール神国からの亡命者と聞いている。」

「今回の神軍侵攻はまるで、連邦の地理を心得ているように鮮やかであった。」

「もしや、その者達は神軍を連邦へと手引きしたスパイではあるまいか？」

「鮮やかな侵攻だったのは認めるが、少なくともアリトナ村では神軍は地理なんて、さっぱり把握していなかった。」

「この参謀、大丈夫なのだろうか・・・。」

「にや、にやに言ってるの！」

「私たちスパイなんかじゃないし！村長さんに聞いてみなよ！」

「マルミがとつさに反応してしまう。」

「まあマルミが村長と仲良しなのは事実だし、ちゃんと調べれば濡れ衣なのはすぐわかることだが、この参謀、一体何が狙いなんだ・・・？」

「参謀！彼らは命をかけて神軍と戦い、村人を救ったのです！」

「それを、スパイなどと、あまりにも無礼ではありませんか！」

「フィリコ將軍が一応フォローいれてくる。」

この人、やっぱりいい人だな。

「だが、その可能性は否定できまい？」

もし、スパイでないというなら、その証拠を見せてもらおう。」

俺とユウキ先輩は黙って聞いているが、内心はやれやれ・・・って感じた。

お互い目をあわせて、やれやれ、という表情を暗に浮かべる。

「証拠・・・ですと？」

「そうだ。先ほどの戦役で交易都市ホルンと首都トルアノを結ぶ輸送路上の

ライム砦が神軍の手に落ちてしまったことは貴公も存じておろう。

その三人が誠に敵でないというなら、アリトナ村と同じように

このライム砦も神軍の手から取り返してもらいたいものだ。」

ライム砦が落ちたのか・・・。

ライムは、連邦の重要拠点である交易都市ホルンを守るためにつくられた軍事砦だ。

連邦の中でもかなり堅牢な守りとなっているあの砦が開戦から一週間もたたずに陥落、か・・・。

不意打ちとはいえ、やはり神国の戦力は絶大のようだ。

「何をバカな！」

ライム砦はすでに敵の手にある！

援軍がくるまで護ればよかったアリトナ村の時とはわけが違う！」

フィリコ將軍のいうことはもっともで、むしろライム砦を落とすのは連邦が一丸となって取り組むべき命題のほうである。

その如何によつて戦局が左右されようという、重要拠点を俺達にまかせよう、というのだから、連邦の将来は危つい。

「できる、できないを問うているのではないのだ、將軍。やるか、やらないか、その気持ちを問うている。」

「サルターラ参謀、彼らは軍人ではない。

いくら、貴殿とは言え、彼らにそれを強制することはできないぞ。

「

来賓っていう話はどこへやらっていう感じだな、もう。

「もちろん、強制はしない。

が、断れば彼らの連邦への忠誠心も、所詮はその程度、ということに……。」

「よさぬか、サルターラ。」

ようやく領王が止めに入る。

もうちょっと早くとめてくれてもいいものだけど、
案外この参謀の発言権とやらは、連邦でもかなり強いのかもしれない。

「はっ、陛下がそう仰せられるのであれば……。」

「すまぬな、若き英雄達よ。

サルターラとフィルバレスは何かと仲が悪くてな、このようなことも日常なのだ。

先ほどの事も、悪気があったわけではない、忘れてやって欲しい。

「

ああそういうことか。

ようは、参謀殿は、フィリコ將軍と対立してて、將軍がつれてきた俺達に

何かと難癖つけて、將軍を困らせようとしているわけだ。

「くぬー！」

領王様！私たちでよければやりますよ！

スパイとかいわれて、黙って引き下がれますかっ！」

マルミが、ずいぶんと熱くなって、売り言葉を見事に買ってしまった。

「お、おい、マルミ、落ち着け！」

俺が慌てて止めにはいるが、予想外の所から合いの手が入ってしまった。

「そうだね、マルミちゃんの考えも悪くはない。

連邦は敵国である神国出身の我々を受け入れてくれている。

今後も連邦に滞在するのであれば、相応の礼を持って応えるべきであろう。」

ユウキ先輩はトルアノ連邦での長期滞在許可と引き替えにこの件を引き受けるつもりのようなのだ。

確かに、連邦での俺達の地位は危うい。

実際に、連邦が俺達の亡命を受け入れたわけではなく、アリトナ村の人が、受け入れてくれただけにすぎない。

そこで、俺達は連邦に受け入れられた、ということを実事として認

めさせると共に
今後も滞在をしたい、ということ的前提に、引き受ける、というわけだ。

メリットはわかるが、それ以上に危険だと思う。

「ユウキ先輩、いいんですか、

結構危険な橋を渡ることになりますけど・・・。」

俺がユウキ先輩に話し終わらないうちに、参謀のやるうが割り込んでくる。

「はっはっは！

女性陣はやる気のようにすな、フィルバレス將軍。

尻込みしている彼はほっておいて、彼女達を派遣してはいかがです？」

「誰が尻込みしてるってんだよ！

わかった、やってやるさ！」

この参謀、何かむかつくんだよな・・・。
くそっ、いらいらする。

「お、おい、カナート！

あつくなるな、冷静に考える！」

「水を差すことはありませんまい、フィルバレス將軍。

当人達はその気なのです、問題ありませんよ。ですよね、陛下？」

結局、参謀にのせられて、引き受けることになってしまった。

ユウキ先輩が引き受けているのだから、間違いはないだろうけど、

俺ももつと冷静にならないと、くそつ……わかってるんだけど……さ……。

「まあ、いいだろう。しかし、さすがに三人だけで行かすわけにはいかん。」

「フィリコ、貴様の第一師団から、彼らに一個中隊を貸し与えてやれ。」

「一個中隊ですか？」

「それで、あのライム砦を陥落させよと？」

「ライム砦を守護している部隊がどの程度かはわからない。」

「だが、アリトナ村に攻めてきた部隊だけでも1個連隊はいた。」

「一個中隊だと、その10分の1程度しかない。」

「神軍がライム砦程の場所を攻める場合、アリトナ村より多くの戦力が割かれていただろう。」

「倍の2個連隊で攻めたとして、どの程度が守備に残っているかはわからないが、」

「2個連隊がそのまま残ったとすると、こちらの20倍の戦力が守っていることになる。」

「正直、アリトナ村での戦いがかわいく思えてくるぐらいだ。」

「それ以上の軍隊を割くことはできん。」

「彼らは聴くところによると、神国の士官候補生だということではないか。」

「経歴も申し分なく、アリトナ村で実戦経験もある。」

「一個中隊と言えど、有効に活用してくれるであろう。」

「しかし……。」

「カナート、と申したか。
それで問題ないな？」

もついまさら引き返せない。ユウキ先輩に目で合図を送り、俺は答える。

「はっ、承知致しました」

「こらっ、カナート！勝手に返事を・・・。」

フィリコ將軍は、参謀の思い通りにいったのが気に入らない、というより

俺達の無謀を心底心配してくれているようでもある。

やっぱり、いい人だな、この人。

「さて、話はまとまったようですね、フィルバレス將軍。

楽しみですなあ・・・彼らがライム砦を落としてくれるのが。」

対して、参謀殿はまったく・・・。

こうして、俺達の新たな戦いが幕をあけた。

第十五章：連邦の公騎士

「まったく、おまえ達、一体何を考えている！」

領王の謁見が終わった俺達はフィリコ・フィルバレス将軍に中隊の引き継ぎを行うため彼の執務室に案内されたが、入るなり、将軍の怒声が響き渡った。

「つつ、耳元でどなるなよ、将軍。」

「これが怒鳴らずにいられるか！」

たった、一個中隊でライム砦を陥落させるだど！？

ライム砦には二個連隊が待機しているのだぞ！！

みすみす、殺されに行くようなものだ！」

「う・・・んなこと言ってたって・・・。」

まあ正直どうやって攻めようかは俺も頭が痛い問題だ。

「ご心配なく、フィルバレス将軍。」

この任務はちゃんと、勝機があつて、引き受けましたから。」

「なっ、なんだと！？」

「ほ、ホントですか、ユウキ先輩！？」

だが、ユウキ先輩の中ではすでに勝算がたっているようだ。本当に、この人、冷静なときはすごいな・・・。

「もちろん。じゃなきゃ、引き受けるわけないだろ？」

しかし、そんなことを言っているようだ、カナート。

君は勝機も見えずに任務を引き受けたんだね？」

「うつ・・・そ、それは・・・。」

「まったく、参謀殿の挑発に乗ってしまっただけか。

君もまだまだ青いところがあるんだな。」

ユウキ先輩は少しうれしそうに笑う。

俺は、顔が真っ赤になって、穴があいたら入りたい気分だった。

ちえっ、参謀の奴がわるいんだよ・・・。

「それより、ユウキ！おまえ、どうやってこの戦に勝つつもりなんだ！？」

フィルバレス將軍は、ユウキ先輩の目の前に怒濤の勢いで迫り、ユウキ先輩を食ってかかりそうな勢いで問い掛ける。

「將軍、今回ライム砦を取り返すのは

北西の交易都市ホルンとの輸送路を確保するため、で間違いありませんね？」

「う、うむ。それは確かだ。

交易都市ホルンはライム砦を落とされ孤立状態にある。

多少の蓄えはあるだろうが、このままでは神軍の攻撃には耐えられまい。」

「つまり、そういうことです。」

ああ、何となく俺はユウキ先輩の意図がわかった。

「交易都市ホルンの守備隊長は、トルアノ連邦でも名だたるメイ・ロミーネ大将でしたっけ。」

「ロミーネ大将は確か公騎士ですよね。」

「う、うむ、よく知っているな、カナート。」

「神国では、どの国の誰が何の騎士位を持っているという情報は割と簡単に手に入るんですよ。」

確かに、メイ・ロミーネ大将が守っているのであれば、何とかなるかもしれませんね。」

「だろう？まああの参謀殿がそこまで考えて、私たちに依頼したのは疑問だがね。」

まああの参謀殿に限っては、それはないだろう。

「おい、おまえ達、一体どういうことだ？

おまえ達はホルンの救援にいくのではなく、ライム砦を狙うのだぞ？」

將軍はまだよくわかっていないらしく、俺とユウキ先輩を交互に見ている。

大きい図体でキョロキョロとする様子がなんともおかしくて、俺は吹き出しそうだった。

「ロミーネ大将ほどの人物であれば、防戦しながらも、ライム砦を落とす」

首都との輸送路を確保しようと、考えられているはずだ。

ですが、何らかの理由で、うまく攻めることができない。
俺達の目的は、ロミーネ大將がライム砦を攻められるように、協力すること、ですね。」

ユウキ先輩はどちらかというと、その笑いをこらえて説明している俺をみて、
吹き出しそうになっていた。

「まあそういうことだ。それぐらいなら1個中隊の任務としてそれ程難しいとは思わないね。
まだ具体的なことは現地の調査をしてみないとわからないが、何とかなるだろう。」

ユウキ先輩は、俺が参謀殿相手にいらいらしてる間にそこまで考えていたのか。
まったく、いつも助けられているのは俺の方ですよ……。

「そういうわけですので、フィルバレス将軍。
できるだけ早く部隊の手配をお願いしたいのですが。
ホルンが疲弊する前に私たちは行動を起こさなくてはならない。」

「わ、わかった、とりあえず中隊と進軍の手配は私がしておこう。
将軍は言うが早いか、部下に指示をだして、さっそく手配を始めてくれた。」

「カナート、マルミ。
君たちも準備をしておいてくれ。」

「あっ、はい！」

俺達は、首都トルアノにゆっくり滞在する間もなく、再び戦場に向かうことになった。

首都トルアノを出発し、アリトナ村を越えたさらに先にライム砦はある。

砦の他に、周囲に野営地がはられ、敵の陣容が伺える。

「砦に人が収まってないですよ、あれ。

あきらかに野戦で戦う気ですね。」

「そのようだね。砦に籠もられるよりはましだと思っけど

こちらの方が数が圧倒的に少ないからね。

さてさて、どうするべきかな。」

俺とユウキ先輩は二人で砦の周辺を偵察している。

一応、ユウキ先輩は中隊長になったので、偵察を部下に任せてもいいんだけど

やっぱり自分の眼でみないとわからないこともあるらしい。

俺は、まあおまけでついてきたようなものだ。

「ロミーネ大将が攻めあぐねる理由はどこにあると思いますか？

確かに数は多いですけど、交易都市ホルンの守備部隊も

かなりの数が配備されているって聞いたことがあるんですが・・・

」。

「ああ、それならもうわかっているんだ。

カナート、君も聞いているだろう？」

「えっ……？」

「今回の侵攻作戦は、神国の新設部隊である蒼騎士団が担っている。アリトナ村に攻めてきたのは、師団長クラスだった。

それでは、騎士団長であるファルナが攻める場所といえは……？」

「あっ……そういうことか……。」

「そう、軍事砦ライム、そして交易都市ホルン。

トルアノ連邦と戦つたのであればここを押さえることが、勝敗の分かれ目になる。」

当然、この砦にいるだろう。星騎の力を持って、ね。」

公騎士は、1000人の戦力に相当すると言われる。

であれば、星騎士は……？」

一万人をもつても、たまるかどうか。

ファルナ先輩が星騎士となって、その力をもって攻めてくるのであれば

公騎士であるメイ・ロミーネ大將は、苦戦せざるを得ない。

「とはいえ、俺達で星騎士を何とかしろっていうのも

結構無茶なことだと思っんですけど……。」

「うん、まだ情報が足りないね。

ということだ。だ。カナート。君に頼みたいことがあるんだけど。」

ユウキ先輩の有無を言わさぬ押しにまけて、俺はその頼みを聞くことになった。

第十六章：潜入

「おい、新入り、そこにある木箱を全部、医務室まで運んでおけ。」

「は、はいっ！」

俺は、そういつてしびしび木箱を運ぶ。

ユウキ先輩の頼みを聞いてみたら、こんなことになっていた。

俺は士官学校でそれなりに神軍の軍規や慣習を見聞きしたし

生まれも神国だから、いかにも、一般的な神国兵士に化けやすい。

ユウキ先輩はブリトニア皇国の生まれで、神国では少し目立ってしまっ。

ブリトニア出身の者は剣の腕にすぐれ、多くがラスティア様所属の征龍騎士団に配属されることもあり、他の騎士団でブリトニア出身者はほとんどいない。

マルミは楽隊希望で皆詰めめの兵士役は難しいし、まあ俺しかいなかったわけだ。

神国からの輸送隊の一人と入れ替わり、俺は何食わぬ顔でライム砦に潜入することができた。

できたのはいいんだが・・・軍隊の下っ端として良いように使われている。

「これ、結構おもいな・・・何はいつてるんだよ・・・。」

木箱を抱え通路をよたよたと歩いて、医務室へと向かう。

本来の俺の目的は、ライム砦に詰めている戦力、つまりは騎士位保持者の数を把握すること。

神国であれば、身分と騎士位はだいたい一致しているから身分の高い騎士がどの程度いるかを調べればいい。

とりあえず、俺が入れ替わった兵士は第二師団所属だったし師団長がここにいるとすれば、最低でも英騎士が一人はいる。ただ、星騎士が団長を務めている場合、第二師団は公騎士であることが多い。

その辺りの確認をしないといけないんだが……。

「よ、ようやくついた……。」

医務室に1つめの木箱を運び終えた。

まだまだ木箱は残っていて、正直うんざりだ。

だが、命令違反して大事になられると困る。

俺はしぶしぶ、歩いてきた道を引き返していた。そんな時だ。

「おかしい、おかしいよ！」

神王陛下が言ったからって、それが絶対なの！」

聞いたことのある声が扉の向こうから聞こえてくる。

「セルフイア、神軍の誰かにそんなこと言ってるの聞かれたらただではすまわないわよ、慎みなさい。」

この声も、聞き覚えがある。

やはり星騎士はこのライム砦にきていたようだ。

「ユウキ先輩がいなくなってるから、姉様はおかしくなったよ！人が笑って暮らせるようにする、それが騎士位を持つ者の務めっ

て言っただじやない！

この侵略戦争のどこに、人の笑顔があるっていつの！」

マルミの話では、セルフィアはファルナ先輩を説得するために神国に残ったという。だがまさか、戦場まで後を追って説得をしているとは思わなかった。

俺は足をとめ、扉の向こうで話される内容に耳をすます。

「セルフィア、何度言えばわかるの。」

公騎士と星騎士では、同じ騎士位でも決定的に違うものがあるわ。公騎士でいた頃は、今の時代の人たちを幸せにしたいと願っていた。

でも、星騎士はそうではないのよ。今の時代の人が不幸になる選択を迫ることもある。

ユウキのことも、今回の戦争のことも、ただそれだけのことなの。

「

ファルナ先輩は、星騎士としてユウキ先輩を反逆者として処理することも、

トルアノ連邦を侵略し、多数の命を奪うことも、仕方がないことだと言っている。

でも、本当にそうなのだろうか……。

「わからない、わからないよ、姉様！

こんなことなら……こんなことなら、

星騎士になんてなってほしくなかった！」

パシーン！

扉の向こうにも響き渡る、大きな平手の音。

「妹でも許されない発言もあるのよ、セルフフィア。」

「うっ、うっ……」

セルフフィアの涙が目には浮かぶ。

セルフフィアは姉であるファルナ先輩を慕っていたしそれだけに、つらいのだろう。

「もう、話はこれでおしまいね。私はいくわ。」

や、やばっ……俺は慌てて扉から離れるが

俺は姿を隠すことはできなかった。

ガチャリつと扉がひらき、ファルナ先輩が姿を現す。

「ん？盗み聞きとは趣味のわるい子がいたものね。」

ふっ……まあいいわ。これを泣いているあの子に渡してあげて。

後、このことは他言無用。それで見逃してあげる。いいわね？」

ファルナ先輩は、兜を深くかぶっていたため、俺がカナートであると気が付いていないようだ。俺はだまって、それを受け取り軽くうなずく。

「あまり、さぼるんじゃないわよ。」

それだけ言い残してファルナ先輩は去っていった。

ファルナ先輩からうけとったのは、ライム地方でも名産の月光の滴という、香水だった。

これをプレゼントしようとしたんだけど、タイミングを失ったのだから。

侵略先で手に入れたお土産を渡せる雰囲気では、ないだろうな。
おれ？俺も無理だよ。とりあえず後で渡そう。
それより今はもっと話すべきことがある。

扉の向こうから聞こえる嗚咽に、俺はそっと近づいた。

第十七章：再会

「しばらく見ない間に、強くなったな、セルフィア。」

俺は、机にうつぶせ、なきじゃくっているセルフィアの後ろからそつと、声をかけた。

「ひつくつ……え……うつく……。」

あれ……？あれ……？」

ファルナ先輩の時のように気づかれなかったことがないように兜はぬいでおいたおかげで、セルフィアはすぐに気がついたようだ。むしろ、俺がここにいるのが何故かわからず、混乱してしまっている。

「ははっ、久しぶりだな、セルフィア。」

びっくりして、涙も止まっただらう？」

セルフィアは俺の顔を見て、目をぱちくりと、何度もまたたかせていたが、

やがて、頭の中で整理がついたのか、また泣き出してしまった。

「か、カナート！」

ううう……ごめんなさい……ごめんなさい……。」

私が……私……何もできなくて……。」

今度は机の代わりに俺をつかって、泣きじゃくってしまっ。やれやれ、強くなったのはいいが、泣き虫は相変わらず、か。

「大丈夫、俺も、ユウキ先輩も、マルミも。みんな無事に逃げる事ができた。おまえは何も心配することはないさ。」

俺はゆっくり、ゆっくりとセルフィアの頭をなでて落ち着かせる。セルフィアはしばらく、泣き続けていたが、涙がかれる前には落ち着いてくれた。

「か、カナートは・・・カナートはどうしてここに？
姉様からは、カナートも反逆罪だつて聞いてたのに・・・。」

「まあ、俺の方も複雑だな。今は神国を追われてトルアノ連邦にやっかいになつてるんだ。」

そのトルアノ連邦が神国に狙われてやばいっていうんで、まあ仕方なくその手伝いみたいなことをするこになつてな。」

「あつ・・・そうか・・・そうだよね・・・。
ここに手伝いってことは・・・あ、あれ・・・？」

セルフィアはようやく、俺がお忍びでここにきていることに気が付いたようだ。

「星騎士になつたファルナ先輩の偵察つてわけさ。
ナイシヨだぜ？」

俺はそうやって、セルフィアに小声で話す。
昔はマルミと三人で、こうやってイタズラの作戦をたてていたな・・・。
ふと、そんな昔の記憶が浮かんでくる。

「いまって、どういう状況なの、カナート。私で協力できることがあれば、するよ。」

姉様には、戦争なんてしてほしくない・・・こんなの間違ってる・・・。

私が・・・私が止めてあげないと・・・。」

さて、どうしたもののか。

ファルナ先輩と身内のセルフィアがいま、神軍内部にいてトルアノ連邦側と通じるというのは、戦略的には有利な話だ。

だが、深く関わってしまうと、セルフィアまで神国を抜け出さなくてはならない。

マルミの時は、あいつがどの程度のことをするのかわからずとりあえず、返事を返してしまったが、今思えば早計であったかもしれない。

マルミは反逆罪にはなっていないが、国境周辺では人相書きの手配書が出回っているらしい。

俺やユウキ先輩と関わったとわかれば、反逆罪が適用されてもおかしくない。

だがそうはいつでも、セルフィアは納得しないだろう。となれば、だ。

「セルフィア。ファルナ先輩も、戦争はしたくないって思っているさ。」

でも、それを押してでも、やらなければならぬ理由がある。

俺達にはその理由はわからないけど、ファルナ先輩もつらいはずだ。

おまえが、それを支えてあげてくれ。彼女の心が疲れてしまわないように。」

「支える・・・？私が、姉様を・・・？」

「ああ、それはきつとおまえにしかできない。」

「・・・で、できるかわからないけど・・・。
カナートがそういうなら、私がんばってみる。」

「頼んだぞ、セルフイア。」

俺はそういつてセルフイアの頭をなでてやる。

そう、これでいい。こいつはここでファルナ先輩の側にいるべきだ。

「で、でもカナートはどうするの？」

「私は何もしなくても大丈夫なの？」

「こっちは、そんなに深刻でもないさ。

いざとなれば、ボルトーナ王国あたりに逃げるし。

しばらくすれば、恩赦とかでて、国にも帰れるさ。」

その場しのぎの楽観的な考えだが、そういうしかなかった。

「わ、わかった・・・。」

でも、何かあったら私、力になるから。」

「ああ、その時は改めて頼みにくるよ。

それじゃ、俺はもういくぜ。あまり長居もできないし。」

「あ・・・うん・・・。」

気をつけてね・・・。」

木箱を運び終えないままさぼっているから
ちよつと騒ぎになっているかもしれない。
早めに撤退しておかないと。

「それじゃ、またな、セルフィア。」

「うん、また……。」

名残惜しそうなセルフィアをおいて、俺は砦からの抜け道へと進む。
まあこれでいいよな。収穫は何もなかったけど。

「あら、もうお帰りかしら、カナート君。」

突如後ろから声をかけられる。
まさか……。

「つ……。ファルナ先輩……。」

「仕事をさぼった兵士がいるって騒いでる兵がいてね。」

「ちよつと事情を聞くとおかしな所があって、ピンときたわ。」

遅かったか……。

俺は輸送兵にばけた時、他の兵には新入りってことでごまかして
いたが

上の階級であれば、新兵を回されるかどうかぐらいはすぐわかるの
だろう。

他にも何かおかしな所はあったかもしれないのだが。

「アリトナ村ではウィルドがまんまと騙されたらしいしね。」

今度はセルフィアをどうたぶらかすのかと心配して戻ってきたけど……。

あの娘のこと、ちゃんと考えてくれていて安心したわ。」

っていうか、会話聞いてたのかよ。

まったく、いつから聞かれていたのやら……。

「セルフィアに危険な真似はさせませんよ。

あいつの気持ちを利用するようなことはしません。」

生きるか死ぬかを決める戦いの時にそういうことを言うのは、甘いのかもしれない。

だが、そうはいつでもできないこともある。

「姉としては君には感謝しているわ。

たった一人の妹を反逆者としてこの手にかけるのは忍びないから……。

そんな君に1つ、良い提案をしようと思ってね。」

「提案ですか……。

俺は、ユウキ先輩の反逆罪が取り消されるまで神国に下るつもりはありませんよ。」

。「その話じゃないの。まったく、ユウキもうまくやったものね……。

まあ今回の話は別。本音を言うとな、カナート君。

私たちはこのライム砦に陣取り、交易都市ホルンを攻略しようとしている。

と、いう風に見えるけど、ホルンなんて攻める気はないのよ、実はね。」

ホルンを攻める気がない・・・？

なら、このライム砦を何故落とす必要があるんだ？

首都トルアノへ向かうだけならアリトナ村方面から進めばいい。

「それでは、ライム砦を落とした目的は何だつて言うんです？」

「目的はすでに果たしているわ。詳しくは言えないけどね。

だから、もうこの砦からいつ撤退してもいいの。

そして、カナート君。君の目的はこの砦を落とすこと、じゃないのかな。」

何でもお見通し、か。

かなわないな、この人には。

「提案つていうのは、それに関係することですか。」

「そうね、カナート君。

君が望むのなら、私たちはこの砦から撤退してもいい。

先ほども言ったように私たちの目的は果たしているから。

ただ、撤退時に連邦からの攻撃を受けるおそれがあり、なかなか退けないだけでね。」

信じて良いのだろうか、この人を。

「君はもう、トルアノ連邦軍と通じているのでしょうか。」

となると、君の所属している部隊は首都防衛隊の一部になるでしょうかから

フィルバレス中將の配下になるのかな。

そうね、君たちの部隊と、後はホルンのロミーネ大将に話をつけ

てくれればいいわ。」

「俺達は神軍が撤退の際に、攻撃をしかけなければいい。

それだけで、この砦を明け渡ししてくれるというのですか？」

「そう。あら、それだけだと条件が良すぎる？」

「いつでもホルンを陥落できる状態にありながらの、無条件撤退だからね。」

戦略的に考えれば、ありえない。

ホルンと神国の補給路は十分確保されており、長期の防衛が可能はずだ。

神国が何らかの目的がありホルンを占領しただけにしても、

ここを無条件で返却するよりは、停戦の際に取引の材料とした方が有利に決まっている。

「それでは、1つお願いをしてもいいかしら。

これを、もう一戦お願い、できるかしら。

どうも、負けっ放しつてのは性に合わなくてね。」

そういつて、ファルナ先輩はエース&キングのカードをだした。

こんな時にカードつて・・・はあ・・・なんか深く考えることもない気がした。

撤退するのを何もせずに見守るだけなら、トルアノ連邦側に被害は何もない。

それで砦が空になるというのなら、願ったりかなったりだ。

普通の相手なら、こうい場合砦に時限式の爆弾を仕掛け

相手が入場した時に・・・というような罠も考えられるのだが

ファルナ先輩が、この有利な状況下で、そんな下卑た手段を使うと

は思えない。

カードゲームの勝ち負けにすらこだわる人なら、なおのこと、そんな勝利を欲することはないだろう。

「わかりました。

でも、ゲームの手加減はしませんよ？」

「ははっ、いうわね、カナート君。

その生意気な鼻をへし折ってあげよう。」

そうして、俺は敵陣のまっただ中で、敵の総大将とカードゲームに興じることになった。

ゲームの勝敗はともかく、こうしている間だけは、

お互い敵同士となってしまったことも忘れ、

最初にであった時のように、お互い笑いあえたと思う。

第十八章：新たな侵略者

ファルナ先輩との間では、撤退の日取りが決められ
それまでに俺が連邦側が攻撃をしかけないよう話をつければいい。

ホルンのメイ・ロミーネ大将には、フィルバレス將軍から話をし
てもらうことにした。

フィルバレス將軍は俺の話に驚いてはいたが、すぐに信じて使者を
送ってくれた。

やっぱり、この人はいい人だな。

トルアノからの攻撃部隊は俺達の中隊だけだが、
念のため付近の守備部隊にも將軍から話をつけてもらった。

こうして、約束の期限を迎え、神軍は何もなかったように撤退し、
俺達は、無傷でライム砦奪還を果たすことができたのだ。

「まったく、カナート、君はすごいものだね。」

確かにファルナを何とかすれば、とは言ったけど

まさか、全軍撤退までさせるとは、思わなかったよ。」

「俺だって、予想外でしたよ。」

「たまたま、ついでにただけです。」

神軍がなぜ、ライム砦を落としたのかはわからない。

いくつか想像がつかないことはないが、どれも想像の域を出ない。

ともかく、連邦に居候する身としては、それなりの恩をすることは
できたのではないかと思う。

「カナート、おまえ、たいしたものだな！」

中隊1つでライム砦を陥落させるなんて、前代未聞だぞ！？
メイ様が、1個師団を率いながら攻めあぐねていた砦なんだから
な！」

一応、俺達の部隊はフィルバレス將軍の指揮下なので
フィルバレス將軍の中隊がホルン砦を陥落させた、となるため
將軍はかなりご機嫌のようだ。

「領王陛下と、サルターラがもうすぐここに到着される。

今回の恩賞と、今後の作戦について話し合つたためだ。」

ふふふ・・・サルターラの悔しがる顔が目には浮かぶなあ！」

將軍もサルターラ参謀には苦労させられているようだ。

翌日の夕刻頃、領王と参謀が到着し、軍議が開催された。
だが、参謀殿はこういう所だけは謀略が得意なようであった。

「なんですと！いま、なんと申された、サルターラ参謀！」

驚きの声をあげて、椅子から立ち上がる將軍。

軍議で今回の論功行賞と今後の戦略に関して、参謀から報告がされ
た直後であった。

軍議には、領王や参謀の他、フィルバレス將軍とその指揮下の土官
が数名、
他に今回の立て役者となった、俺と中隊長のユウキ先輩が出席して
いた。

そこで告げられた作戦に少なくとも俺とユウキ先輩は絶句してしま
った。

「フィルバレス将軍、もう一度言うが、これは決定事項だ。

我々トルアノ連邦は、ボルトーナ王国、ブリトニア皇国と軍事同盟を結び、

神国への侵攻を開始する。すでに、ブリトニア皇国との盟約は締結し

ボルトーナ王国ともおおむね話については。」

参謀殿は俺達が砦を落とるわけがないと思っていたし、だからこそ隣国の力を借りて、砦を奪還するつもりだったのだろう。所が俺達が簡単に砦を落としてしまったものだから

その行き場がなくなり、無理矢理に神国への侵攻を決めているようにも思える。

「神軍からライム砦を奪還したとは言え、相手は大陸最大の軍事力を持つ

デイ・ラオール神国ですぞ！星騎士をもたぬ我が国がまともにやり合うのは危険すぎます！」

「そのための盟約であろう。ブリトニア皇国には星騎士もいる。

同盟で力をあわせれば、神国とて、恐れるに足りないわ。」

この参謀、本当に何も考えてないよな。

確かにブリトニア皇国には星騎士がいる。だが、たった一人だ。

対して、神国の星騎士は、ファルナ先輩もいれて5人。公騎士の数からしても、圧倒的に違う。

まともにやりあって、勝てるはずがないんだが……。

「意見を申し上げたいのですがよろしいでしょうか？」

怒り沸騰の将軍に変わり、ライム奪還の功により連隊長に昇格した

ユウキ先輩が手を挙げた。

「よろしい、ミツカセ殿、意見をもつてみなさい。」

領王からの許可をもらい、ユウキ先輩が話し始める。

「今回の戦は神軍から、不意打ちに近い宣戦布告を受けました。

非は一方的に神軍にあり、今までの戦いは連邦に正義があること
と思っております。」

「そうであろう、そうであろう。」

まったく、神軍の卑怯な戦のせいで、何人が犠牲になったことや
らー！」

参謀がここぞとばかりに相打ちをしてくるが、ユウキ先輩はまったく
相手にせず、次の言葉を重ねる。

「ですが、ライム砦も無血開城となり、神軍からは積極的な交戦意
欲を感じられません。」

ここは、ポルトーナ、ブリトニア両国との軍事同盟を背景にして、
外交政策で有利な

停戦交渉を行う方がよろしいのではないのでしょうか？」

まあ俺としてはユウキ先輩に賛成だ。

例え神国であっても3国相手には無傷ではすまない。

神国の勝利だとは思いますが、それなりに被害もでるだろう。

ファルナ先輩の口振りからも、目的が達成されたのであれば、無理
に戦おうとはしないはずだ。

「陛下、ユウキの意見に私も賛成ですぞ。」

連邦の民は戦争など望んではいません。

いま神国へ侵攻をすれば、100年は続く大戦となってもおかしくはありませんぞ！」

「ふむ……フィリコもそう思うか。

うーむ……。」

領王は悩んでいるが、そこで参謀のちゃちゃがはいる。

「陛下、悩んでいる場合ではありませんぞ！」

すでに、ブリトニア皇国には出兵の要請をしております！」

いまさら、なしにしてください、等と言えば相手の面目をつぶしてしまいます！」

その時、なんと申し開きをなさるおつもりですか！」

相手の面目というより、参謀殿が先走りすぎただけだと思うのだが。

「うーむ……。」

この領王、悪い人ではないんだろうけど、優柔不断っていうかなんて言うか。

参謀みたいな押し強い人に言いくるめられてしまうタイプだな……。

そこに伝令が現れ、参謀殿に何事かを報告して去っていく。

「お喜びください、陛下！」

ポルトーナ王国も盟約を結び、軍を差し向けてくれたとの報告が入りました！」

もはや、二国が軍を向けてくれている以上、いまさら覆せないで

しょう。

ミツカセ殿の案も悪くはないですが、いささか時期を逃した感がありますなあ！」

まったく、この参謀殿は変なところで根回しがいいようだ。

今の伝令のタイミングも偶然じゃないだろう。決定的な材料をここぞというタイミングでもってくる。そういうタイプだな。

「仕方あるまい、ミツカセ殿。

我が国も、同盟の盟主という立場にあり、弱気になるわけにもいかない。

停戦の話も考えてはおくが、まずはこちらの力を神軍にみせておくのも悪くはなからう。」

「そうですね・・・。

陛下がそうお考えなのであれば仕方ありません。」

ユウキ先輩はおとなしく引き下がった。

まあ俺達のような新参にはこれ以上どうにもできない。

神軍の侵略から守るため、連邦に荷担したはずが

今度は俺達がその侵略者にまわることになったのだ。

第十九章：ブリトニアの将

水と芸術の都、マルアイア。

芸術文化の発信地として栄え、トルアノ連邦のホルンと並ぶ大陸最大の貿易都市でもある。

星騎士ミリファリア様率いる聖騎士団がこの守備を担う。

聖騎士団の規模としては3個師団程度で公騎士は一人、他は英騎士と小騎士が数名。

このマルアイア攻略には参加したのはトルアノ連邦とブリトニア皇国の2国。

ポルトーナ王国は、政情不安を理由に物資支援のみとなった。

トルアノ連邦からは、公騎士のメイ・ロミーネ大将と英騎士のフィ
ルバレス中將が

計2個師団を率いて参戦。公騎士のユウキ先輩も連隊長として参戦
する。

ロミーネ大将の元にはサルターラ参謀が副官として同行する。

ブリトニア皇国からも2個師団が参戦。

星騎士クライアート・ブリトニア大将率いる斬撃師団と、

公騎士であるユメ・シノザキ少将の飛兵師団。

星騎士や公騎士の数、兵士の数だけをみれば戦力的にはやや有利で
ある。

もちろん、ファルナ先輩の蒼騎士団や神都を守護する中央騎士団から
援軍が差し向けられれば、途端に不利になる危うい状況ではある。

だが……。

「ミリファリアは、神国の星騎士の中では一番弱い。あれでもな。ミリファリア程度には、俺抜きで勝てるぐらいじゃなきゃ、この先、ラスティアやレーナレーナといった、戦いに長けた星騎士と渡り合えないぜ？」

トルアノ連邦だけでは、たった一人の星騎すら相手にできないというなら

ブリトニア皇国としても、神国と本格的に戦うことはできないな。

「

マルアエア攻略のための軍議で、ブリトニア皇国側の星騎士であるクライアート・ブリトニアは、マルアエア攻略についてはトルアノ連邦の部隊だけで行うように、と提言してきた。

「ばかな！何のための同盟なのだ！

おまえ達はここまできて、何もせずに待っているだけだと言うのか！？」

礼によつて我らがサルターラ参謀はご立腹のご様子。

まあ参謀じゃなくても、この段階でそういうこと言われたら、ちょっと困るな。

「神国には星騎士が5人はいるはずだ。

マルアエアが攻められれば、星騎士の誰かが援軍にくる可能性が高い。

その時は、俺がそいつの相手をしてやるよ。」

この男のいうこともわからないではない。

例えば、南方戦線を任されていた蒼騎士団率いるファルナ先輩は撤退したとはいえ、有事の際にはマルアエアに駆けつけてくるだろ

う。

当然、そうならばトルアノ連邦側でも星騎士一人を何とか相手にしなければならなくなる。

それなら、比較的、戦いには向いてないミリファリア様を相手にしろ、というのだ。

だが、公騎士二人で星騎士一人を相手にする、というのはかなりきついと思う。

「ふざけるな！

どうせ、我が国だけ戦わせて、漁夫の利をえるつもりであろう！
そうはいかぬぞ！皇国からも兵をだすのが筋であろう！」

俺の意見としては、とつと引き返しましょうよって思っているが火に油をそそぐこともできず、成り行きを見守っていた。

「わかったわかった、うるさいオヤジだな、おい。

よし、うちからはユメをだそう。

それなら文句はないだろ？」

そういって、隣でむっすりした表情で控えていた、

20にもならぬであろう少女に話しかける。

一応、あの若さでも少将なのだそうだ。

「クライアート様、ご自分が戦いたくないからといって、

私に押しつけるのはやめて頂けますか？」

言葉は冷静だが、かなり怒り心頭といった雰囲気かじみ出てる。

「こんな子供一人もらった所で、何がかわるというのだ！」

貴様、我々を侮辱するにも程がある！」

その言葉を聞くやいなや、ユメと言われた少女の顔が子供と言われたことに腹をたてたのか、もともとむっすりしていたのが、さらに手をつけられないぐらいの不機嫌さになる。

「……トルアノ連邦の参謀閣下は分別もつかぬお人なのでしょうか。」

私はブリトニア皇国の將軍位をライカ皇女より賜っています。その私を、愚弄するということは、ブリトニア皇国の將軍位を、ひいては皇国そのものを、愚弄するということになります。それを承知で、そのような大言をはかれていますのでしょね？」

参謀が、まあ……火に油ってやつだ。

ユメ・シノザキ少将は、冷徹なオーラをひしひしとほとばしらせている。

「ひ、ひいつ……ち、ちがつ……」

……参謀、びびりすぎだろう。

参謀殿はあたふたしながら、ロミーネ大将の後ろに逃げ込んだ。まったく、どこの子供だよ、あんたは……。

「シノザキ少将、無礼をお許しください。

我々連邦のものは、まだまだ皇国の事情に疎く、皇国の武を知らぬものも多いのです。

サルターラには、私の方から言い聞かせますので、この場はお許し頂けますようお願いいたします。」

仕方なし、といった感じでロミーネ大将が謝罪する。
実際、ブリトニア皇国は他国の將軍並みの力量があつて、
はじめて士官になれると言われるぐらい、個々の力量が高い。

騎士位の保持者も神国ほどではないが、かなりのものだし
ユメ・シノザキ少将は公騎士でもある。

ブリトニア皇国の少将で、公騎士というだけでも、
かなりの力量をもつてであろうことは想像に難くない。

それを、子供というだけで軽んじるのは
参謀殿があまりにも無知という他、言いようがない。
本当に、なんでこんなのが参謀なのか……。

「はっはっは、ユメ、びびらせすぎだろう！
いやいや、ロミーネ大将、こちらのユメが大人げなくて迷惑をか
けた。」

こちらからもあやまろう、すまない。
こいつも、ちょっと短気だけど、根はいいやつなんだよ。」

クライアートが間にはいつて、この場は収まる。

ユメ・シノザキ少将からは冷徹なオーラが消えることはなかったが。

その後、参謀殿無礼の手前、ブリトニア側の意見を無視することは
できず

こちらは星騎士を温存した形で、マルアイア攻略を行うことになっ
た。

まったく、参謀殿も余計なことしてくれるよ……。

第二十章：星騎士の資質

マルアイア攻略の役割が決まり同盟軍はマルアイアを目指して進軍していた。

だが、もう敵の攻撃範囲にはいるうというのに、まだ具体的な作戦指示がこない。

フィルバレス将軍はあわてて、先頭をいくロミーネ大将に声をかけた。

「メイ様、そろそろマルアイア領に入ります。

神国側の星騎士をどのようにすべきか、対策を考えねば……。」

ひたすら進み続けるロミーネ将軍を心配し

フィルバレス将軍が声をかける。

「フィリコ、今回のマルアイア攻略についてなんだけど……。

ミリファリア・エスシオールの相手は私一人でやろうと思うわ。

あなたは、ユウキとシノザキ少将をつれて、他の兵の相手をお願いできないかしら。

そちらの作戦はあなたに任せるから。」

「な、なんと!？」

星騎士を相手にお一人では、いくらメイ様でも無謀すぎます!

ここは慎重に作戦を練って挑むべきでは……!」

行軍の最中に二人の会話が聞こえてくる。

ロミーネ大将はトルアノ連邦随一の名将として名高いと聞いているがその割にはずいぶんと無策のように見える。

「フィリコ、賭けてみるしかないのよ。」

この賭けに負けるのであれば、最初から私達に勝ち目はないし神国との和平を考えていくべきなのだと思う。」

「い、いつたい何の話なのですか、メイ様？」

お、おいユウキ！おまえからも何とかいってやってくれ。」

フィルバレス将軍が困ってしまつて、ユウキ先輩に声をかける。フィルバレス将軍つて、ロミーネ大将にはなんか弱いよな。

「ロミーネ大将、何かお考えがあるのであれば

せめて私たちだけでも話しては頂けませんか。

何も説明頂けなければ、ロミーネ将軍お一人で、というのは賛同致しかねます。」

ロミーネ大将は少し悩んでいたが、ユウキ先輩がゆずることがないとわかると

深いため息と共に、ぽつりとつぶやくようにいった。

「現世との決別……。」

一瞬なんと言つたのか聞き取ることができなかった。

「えっ？」

「それが、星騎士になるための資質。

多くの公騎士が、いえ……公騎士になれるだけの資質が故に、星騎士としての資質を得ることができないでいる、大きな要因。

クライアート殿も、神国の新しい星騎士も、私に同じことをいうのよ。」

ふふっ……私、そんなにこの世に未練があるように見えるのかしらね……。」

星騎士の資質……それが現世との決別？

神国では、星騎士は血筋によって生まれると言われてきた。

星騎士を排出する家系は限られていたし、

星騎士がでた家系からは公騎士になるだけのものが多い。

それだけに、俺にとっては初めて聞く話であった。

「信じる、信じないは己次第。

ただ、今まで出会うことすらなかった星騎士に二人も続けて出会う、

そして、同じ苦言を二人から受ける。

私は、変わるのかも知れない。フィリコ、私は一人で行くわ。

私が戻らなかつたら、あなたは陛下に和平の申し出を行うように。」

そういつて、フィルバレス将軍がとめるのも振り切り馬にまたがる。

「私が、この身が星騎を授かるにふさわしければ、我らがトルアノにも

勝利の恩恵があるでしょう。フィリコ、ごめんなさいね。」

そう言い残して、ロミーネ大将は馬を駆り、マルアイアへと一人向かっていった。

「わ、わわ……メイ様！

ど、ど、どうすればいいんだ！

こ、こんなことになるなんて……。」

フィルバレス將軍はかなり慌ててる。

ほんと、この人、ロミーネ大将のことになるよ、だめだな……。

「カナート、私もロミーネ大将の後を追うよ。」

ユウキ先輩は言うが早いか、馬に乗り俺にそう告げる

「ちょ、ちょっと待ってください！

ユウキ先輩まで、どうしたっていうんです！」

「ファルナが、ロミーネ大将にいった言葉が気になる。

私は見届けたい。ファルナが、得たもの、目指したものが
本当に正しかったのか。私の選択が間違ってたのかを。」

ファルナ先輩？ああロミーネ大将の話にあった

神国の新しい星騎士ってファルナ先輩しかいないか。

それにしても、ユウキ先輩まで……。

「わかりました、でも俺もついていきます。

俺はユウキ先輩の副官ですからね、これでも一応。」

「ふふっ、そういつてくれるとうれしいよ。実は、一人だと少し不安だね。

感情が……押さえきれないかもしれない……。

でも、カナート。君なら冷静に私を正してくれる。

期待して……いいかな？」

ユウキ先輩は珍しく、媚びるように俺をみつめる。

不覚にも、俺の心は少し高鳴った。

「もちろんですよ。」

ユウキ先輩に無茶はさせられませんから。」

「ふふっ・・・ありがとうございます。それじゃいっこうか。」

俺は、当分現世とは決別できそうにない。

それは、むしろいいことだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524ba/>

星騎士

2012年1月9日04時58分発行